

## 9.2 長崎県海域におけるアサリ資源の回復の取組(アサリの母貝場造成)

A6海域は人工的に覆砂を行うことで底質改善されたアサリ漁場において地撒き式養殖が行われているが、近年着底稚貝の減少及び発生した天然稚貝の生残率が低いことによる漁獲量の減少が生じている。本海域は既存の覆砂漁場が中心であるため、底質の改善による漁獲量の増加は効果が低いと考えられる。

### 9.2.1 アサリの母貝場の造成

長崎県では、A6海域において着底稚貝を増やして有明海のアサリ資源の回復を図るため、アサリ母貝場を造成することに取り組んでいる。図 9.2-1 に実施場所を示す。

諫早湾漁業協同組合のアサリ漁獲量の推移と減少要因を図 9.2-2 に示す。同海域では、有明海全域で見られる地場発生の天然貝の減少に加えて、移植貝の成長や生残率の低下がみられており、その原因・要因として、底質以外の環境要因の悪化、エイ類、カモ類、巻貝類による食害、餌料環境の低下が示唆されている。そこで、食害や環境要因の改善(主に逸散や擾乱の軽減)によるアサリ増産効果を確認するため、袋網による技術開発に取り組んでいる(図 9.2-3)。



図 9.2-1 試験実施位置

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

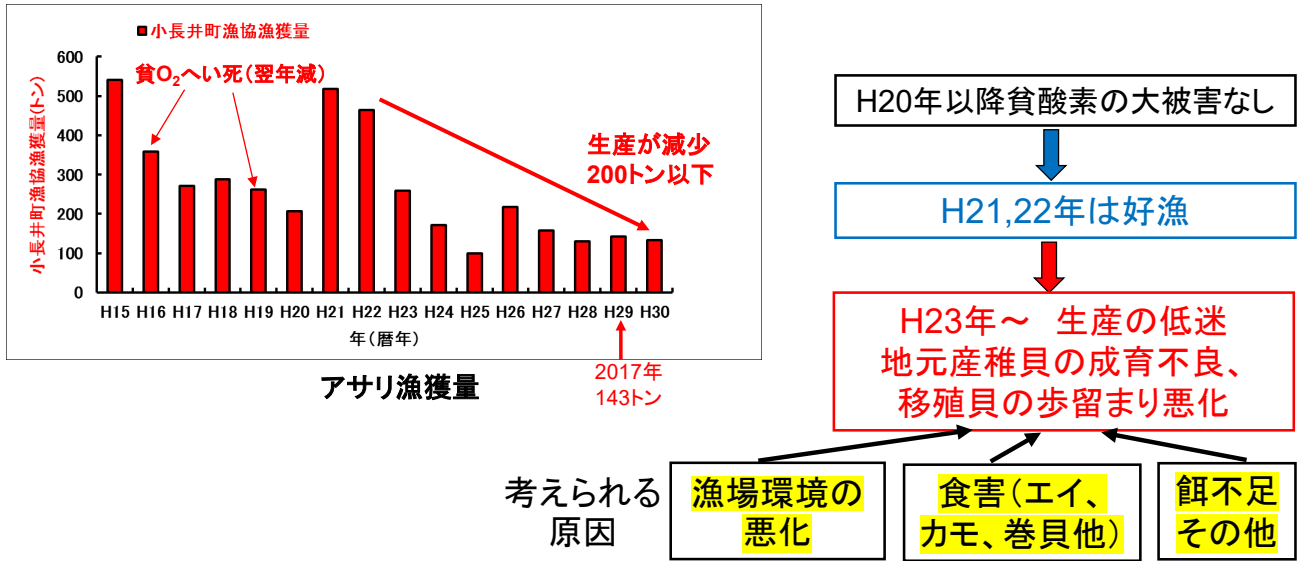


図 9.2-2 諫早湾漁業協同組合のアサリ漁獲量の推移と想定される減少要因

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

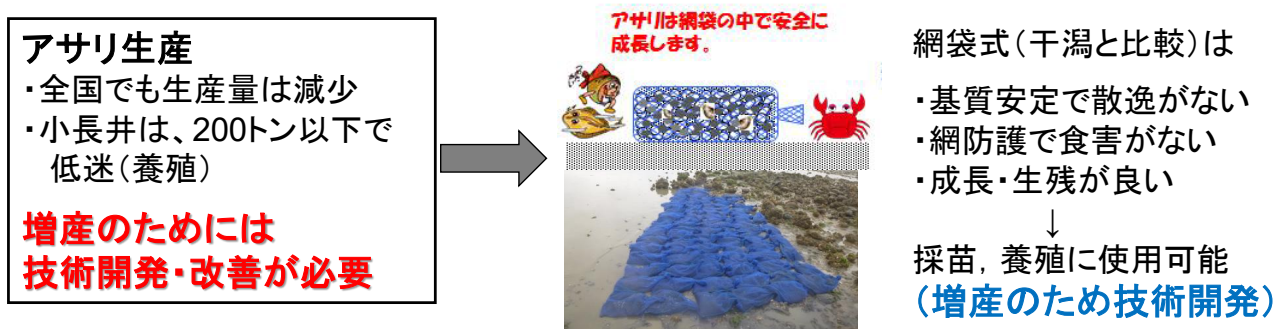


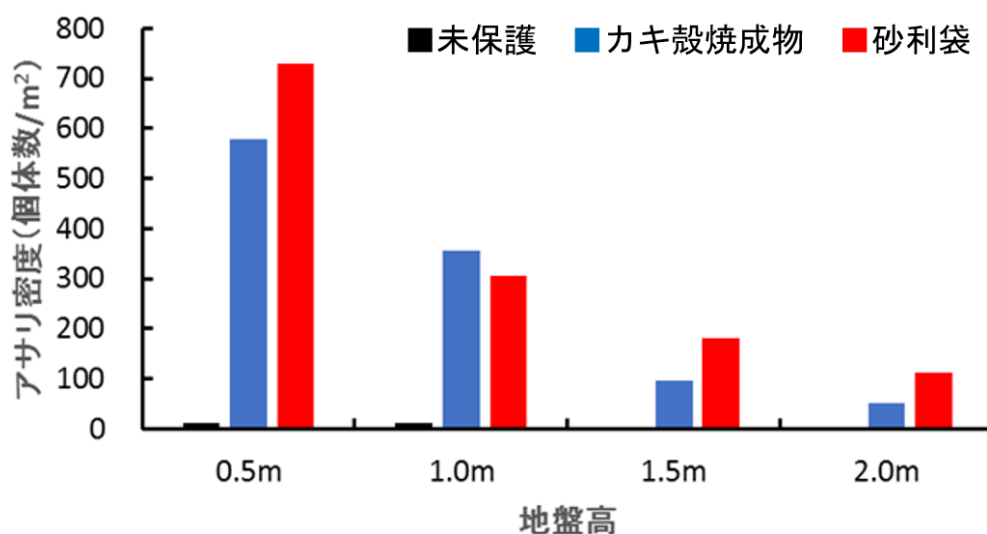
図 9.2-3 アサリ増産のための砂利袋等による技術開発の状況

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### (1) 瑞穂地区での調査結果

2015(平成 27)年度～2018(平成 30)年度にかけて、主に未利用漁場の覆砂による底質改善策と併せて、従来の地蒔き養殖方式と網袋を用いた資源保全策を実施して比較検討した。母貝造成試験として、網袋に砂利(砂利袋)とカキ殻の焼成物(カキ焼成袋)を入れ、稚貝の着生について地盤高ごとに評価した。

2018(平成 26)年度の瑞穂地区カキ殻焼成袋内の稚貝調査の結果を図 9.2-4 に示す。5 月に設置した砂利袋やカキ焼成袋に多くのアサリ稚貝が着生し、その後も成長して多くが生残した。また地盤高 0.5m でその効果が最大となった。対策を実施しなかった原地盤では、いずれの地盤高でもアサリの生残はほとんどみられなかった。



網袋:1.2 分目 30×60cm, 砂利:7 号砕石 6 kg程度  
カキ殻焼成物区(砂利:カキ殻焼成物 = 4:1)で全体 6kg

図 9.2-4 2018(平成 30)年度の瑞穂地区ケアシエル等袋内稚貝調査の結果

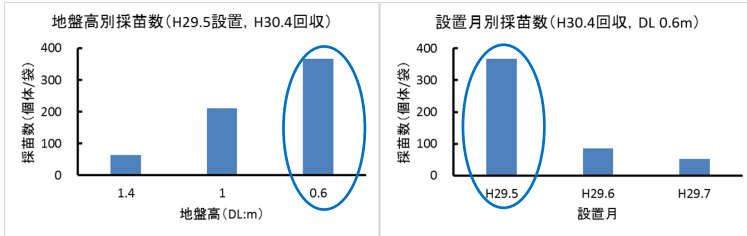
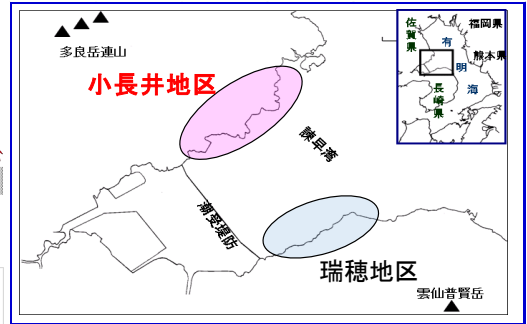
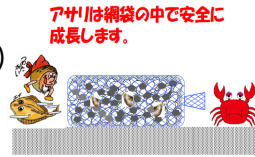
出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第 4 回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### (2) 小長井地区での調査結果

2016(平成 28)年度に小長井地区で同様の取組を行った結果を図 9.2-5 に示す。ここでも地盤高 0.6m において高い採苗結果が得られており、設置後おおむね1年間後までに回収すると、高い歩留まりを得られることが判明した。

○調査(8回/年:計40回)

- ・網袋の設置場所(地盤高等)
- ・設置・回収時期(季節)
- ・簡便な回収手法開発 など



**設置状況**  
 網袋内砂利量3-4kgだと袋安定しない。5kg以上の砂利が必要

**回収手法**  
 労力軽減と回収後の砂利袋再設置

図 9.2-5 アサリ網袋採苗技術:地元産稚貝増産・活用による生産性の向上の状況

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

(3) 長里自営漁場での調査結果

長里自営漁場における試験結果を図 9.2-6 に、アサリ網袋養殖技術として高い歩留まりによる生産性の向上の試験結果を図 9.2-7 に示した。砂利袋による採苗に関して、秋設置(10月～)では1年後の殻長は20mm以下であり、翌春に漁獲サイズには至らないことから、春設置(3～6月)で1年後に漁獲サイズである30mm以上の個体を選別して収穫し、残ったサイズのものを再設置し、半年後の10月に25mm以上のサイズで回収後、養殖用種苗等に活用することを検討中である。これらの作業の効率化のため、砂利袋の最適な設置地盤高、砂利量や回収方等を検討中である。

なお、未保護の原地盤ではアサリの生残がほとんどみられない。図 9.2-4 をみると、2018(平成30)年8月の段階で、未保護の原地盤でも小型稚貝が着生していたが、その後ほとんど生残しなかった。このように、砂利袋等による保護により、アサリの生残率が著しく向上することが判明した。一方で、これらの海域のうち、2011(平成23)年以前でも底質改善されていた漁場では一定のアサリの漁獲がみられた。この間に、洗掘等によるアサリの流出を加速させるような潮流や潮汐の大きな変動があったとは考えにくい。2011(平成23)年以降の稚貝発生や生残率の低下と袋網による保護の効果については、海域環境等、さらなるデータの蓄積を行って検討する必要がある。

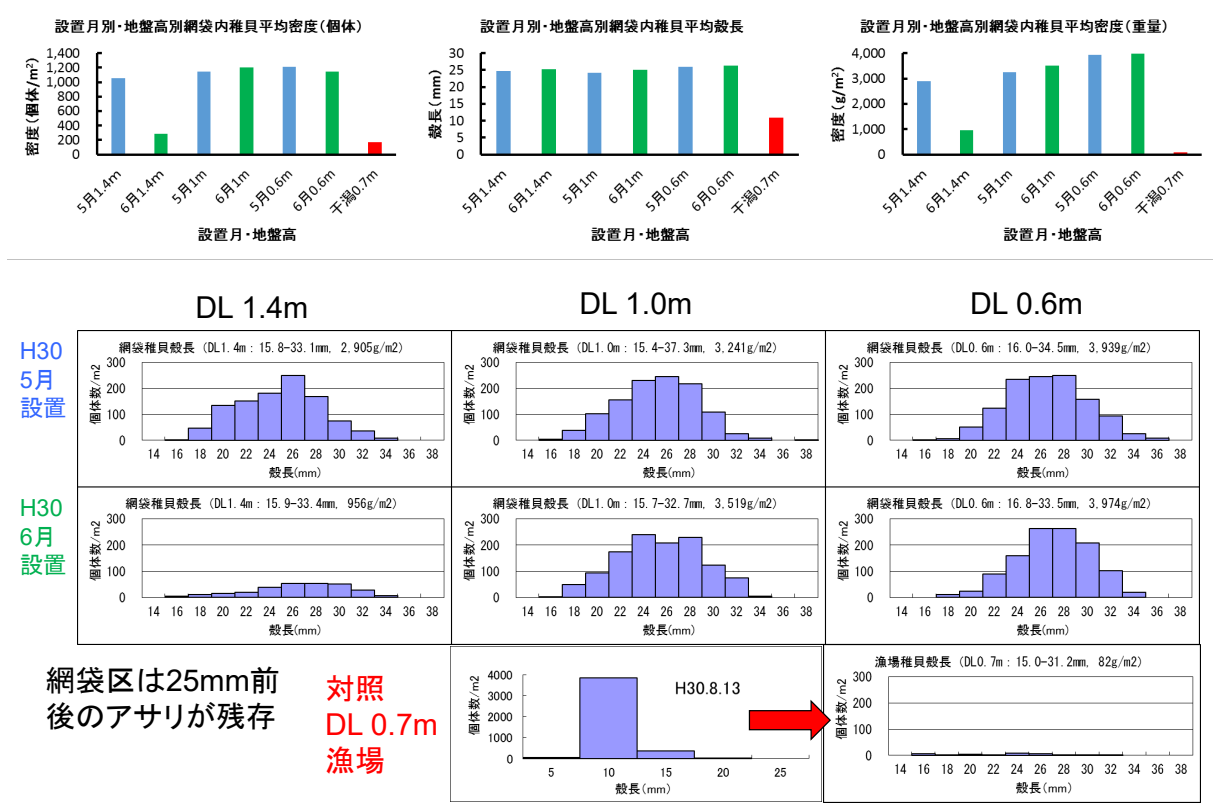


図 9.2-6 長里自営漁場における試験結果(2018(平成30)年5-6月設置, 2019(平成31)年2月回収)

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

○調査(8回/年:計24回)

- ・漁場に適した収容密度
- ・適した配置等

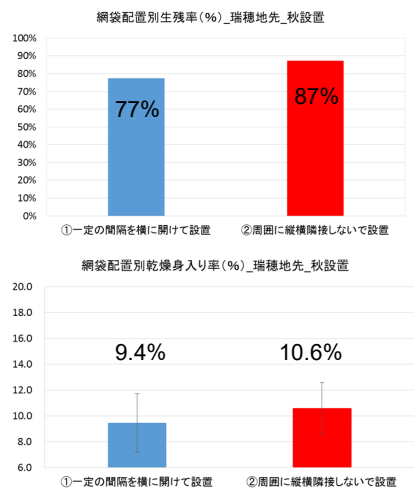
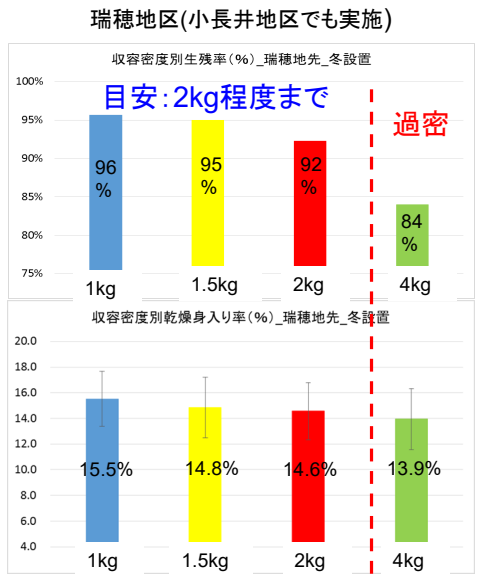
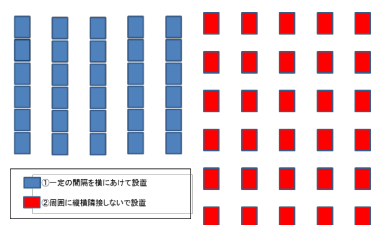


図 9.2-7 アサリ網袋養殖技術:高い歩留まりによる生産性の向上試験結果

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### 9.3 アサリの実証実験場所の環境や生息状況の調査結果

水産庁では、アサリを対象種に有明海沿岸各地の様々な特性に対応し、漁業者等が漁船や漁具等も活用して実施することのできる効率的な漁場環境の維持・改善のための技術開発・実証を2013(平成25)年度から2017(平成29)年度に、図 9.3-1 に示す18地先25漁場の干潟域において実施した。



※( )内は調査地点番号

図 9.3-1 事業実施箇所

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

#### 9.3.1 調査の内容・方法

各実証実験場所の環境特性やアサリ生息状況を把握するために、各地先で設定した地点において環境調査を実施した。調査項目は表 9.3-1 に、各地先の漁場の概要は表 9.3-2 に示すとおりである。

表 9.3-1 調査項目

項目		備考
物理	流況, (一部地先で波高観測も実施)	連続観測
水質	水温, 塩分, クロロフィルa, 濁度	連続観測
底質	粒度組成, 強熱減量, COD, 硫化物, 中央粒径	表層3cmまでを採取し分析
生物	初期稚貝、アサリ生息状況	個体数、殻長を調査

注)連続観測:流況、水温、塩分は海底面上10cmで観測。クロロフィルa、濁度は海底面上20cmで観測

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」



表 9.3-2 各地先の漁場概要

地先	概況	
福岡県 柳川, 大和高田, 大牟田	<ul style="list-style-type: none"> <li>筑後川などの河川からの土砂流入の影響を受けやすく、泥または砂泥質の漁場が広がる</li> <li>各地先の中でも、大和高田302号地区や大牟田観測塔近傍では、泥土が堆積し、漁場環境が悪化している</li> </ul>	
長崎県 小長井	<ul style="list-style-type: none"> <li>泥干潟に覆砂による漁場整備が実施され、アサリ養殖が行われている砂泥質の漁場である</li> <li>ホトギスガイの除去など積極的な管理が行われている</li> </ul>	
熊本県	荒尾, 熊本北部	<ul style="list-style-type: none"> <li>一部で泥土の堆積が見られるが、砂質の漁場が広がる</li> </ul>
	岱明, 滑石, 大浜, 横島	<ul style="list-style-type: none"> <li>菊池川の河口近くに位置しており、出水時の泥土堆積が心配される</li> <li>横島地先では、秋季以降のアサリの減耗が問題とされている</li> </ul>
	河内, 小島, 沖新	<ul style="list-style-type: none"> <li>白川の河口近くに位置しており、出水時の泥土堆積が心配される</li> </ul>
	畠口, 海路口, 川口, 住吉, 長浜	<ul style="list-style-type: none"> <li>緑川の河口近くに位置しており、細砂分が多い漁場である</li> <li>波や流れの影響も強く、底質が固くしまった漁場も存在する</li> </ul>

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### 9.3.2 調査結果

#### (1) 各実証実験場所の底質環境特性

各実証実験場所の対照区(原地盤)の調査結果(2013(平成 25)年度~2017(平成 29)年度、18 地先 25 ヶ所)を用いて検討した。各実験場所の対照区における底質調査結果の平均値を用いてクラスター分析を行った結果は図 9.3-2 に示すとおりである。

シルト・粘土分や強熱減量の違いにより、底質を6グループに区分した。

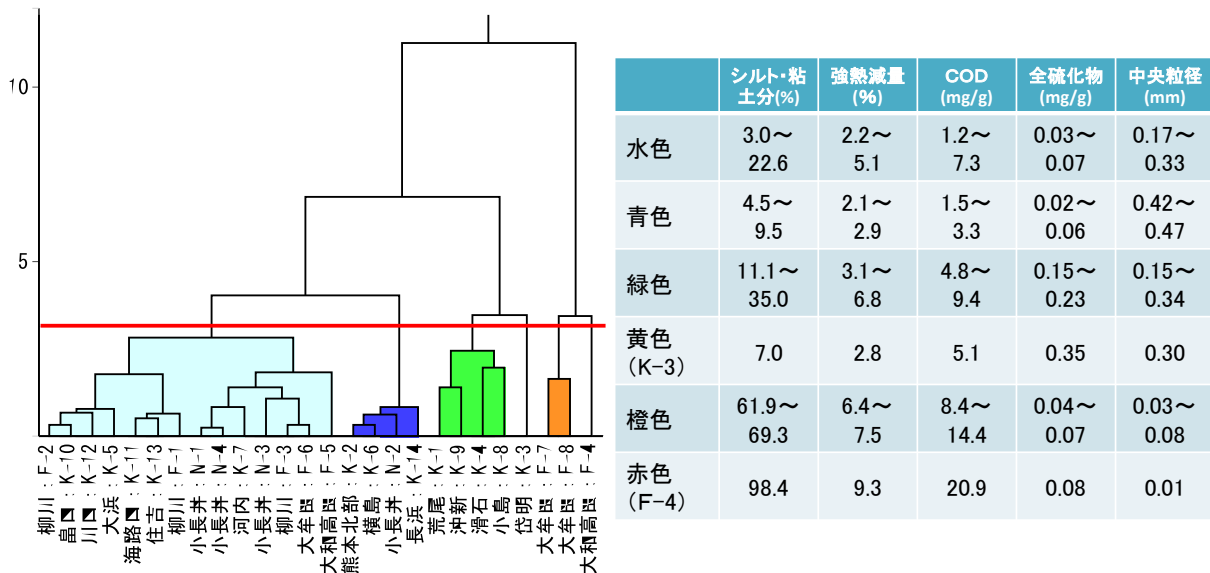


図 9.3-2 底質調査結果の平均値を用いたクラスター分析結果

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

クラスター区分ごとのアサリの成貝個体数は図 9.3-3 に示すとおりであり、シルト・粘土分の多い場所で個体数が少なくなる傾向がみられた。

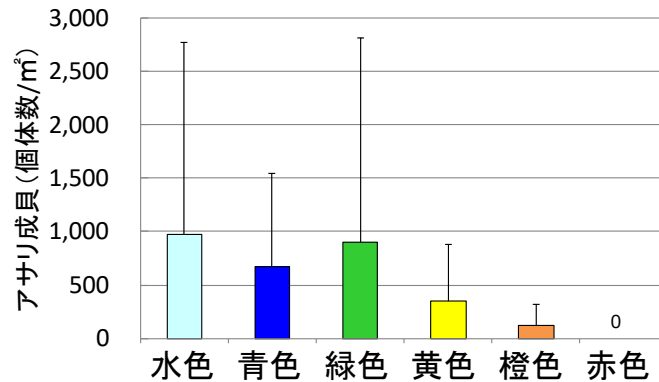


図 9.3-3 クラスター区分ごとのアサリの成貝個体数

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

## (2) アサリの成貝、稚貝の生息環境適性指数(HIS)

アサリの成貝、稚貝の生息環境適性指数(HSI:Habitat Suitability Index) (以下、「HSI」という。)を各実験場に当てはめた結果は図 9.3-4 に示すとおりである。なお、HSI は以下の式より求めた。

$$\text{※HSI} = \text{SI}_{\text{シルト粘土分}} \times \text{SI}_{\text{強熱減量}} \times \text{SI}_{\text{COD}} \times \text{SI}_{\text{硫化物}} \times \text{SI}_{\text{中央粒径}} \times \text{SI}_{\text{含水率}}$$

底質調査結果からみた HSI は、成貝、稚貝ともに、シルト・粘土分の高い地点(F-4、F-7、F-8)で低い結果であった。

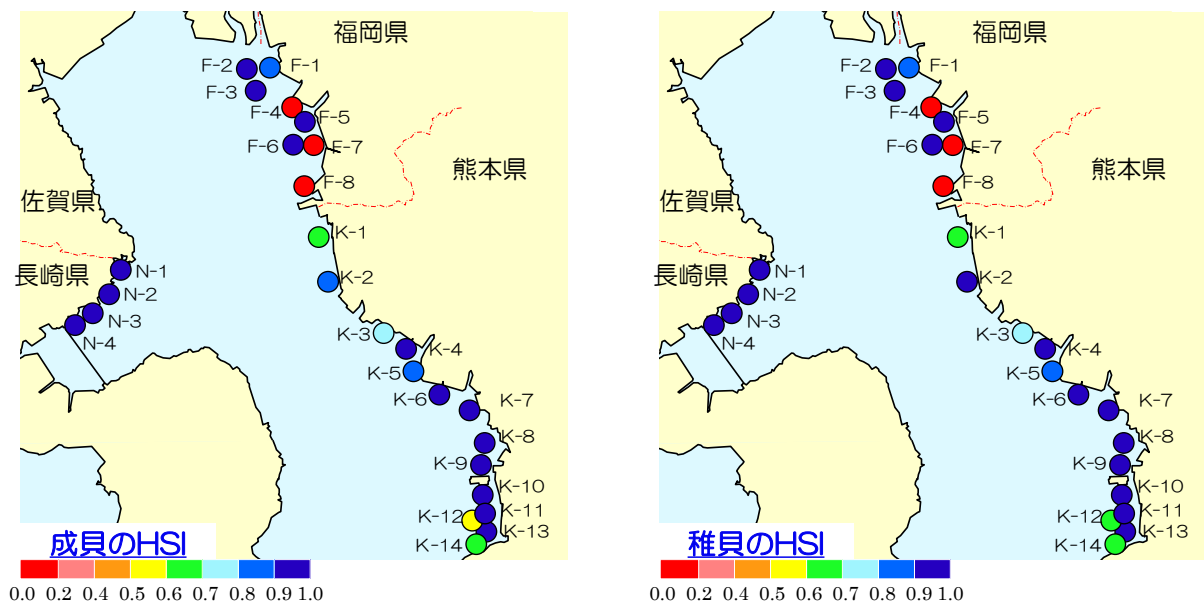


図 9.3-4 アサリの成貝、稚貝の HSI

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」



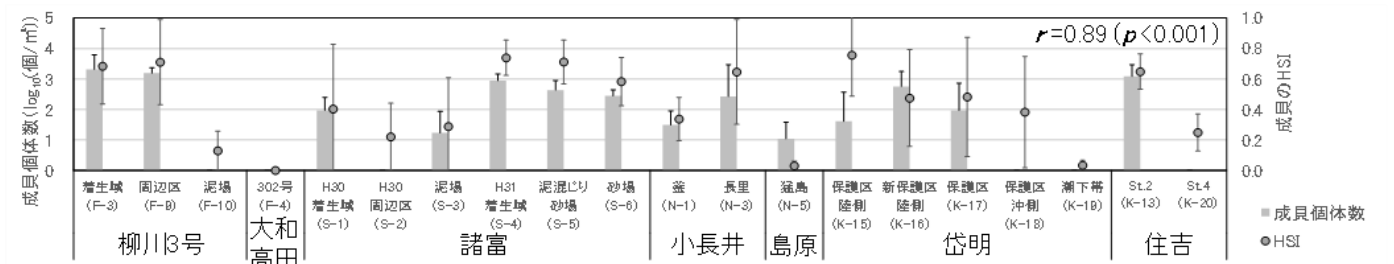
[補足説明]

本事業では、各実験場所のアサリの生息場所としての適性を図 9.3-4 に示すとおり、HSI を用いて評価を行った。この HSI は、シルト粘土分、強熱減量、COD、硫化物、中央粒径、含水率を評価項目とする SI モデルにより算出されている。

この HSI の精度向上を図るため、HSI の算出に利用した評価項目である中央粒径の SI を変更(0.5mm 以上)するとともに、水温及び低塩分が出現した時間の SI、地盤高や底面摩擦速度の SI を追加した。さらに、それぞれの SI について、様々なモデルを検討し、HSI が最適値となるようモデル式の検討を行った。

$$HSI = \min(SI_{\text{強熱減量}}^{1/4}, SI_{\text{COD}}, SI_{\text{硫化物}}^2, SI_{\text{粗砂以上割合}}^{1/3}, SI_{\text{含水率}}^2) \times \min(SI_{\text{水温}}, SI_{\text{低塩分率}}) \times \min(SI_{\text{地盤高}}, SI_{\text{底面摩擦速度}}^{1/2})$$

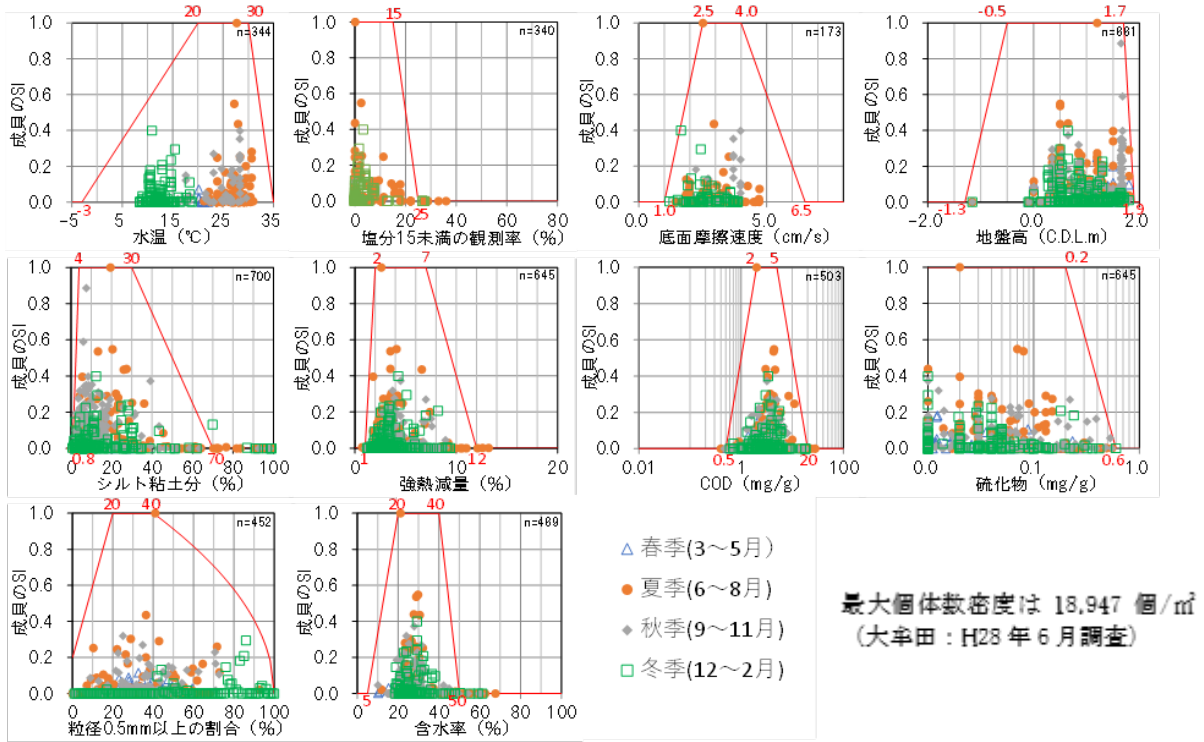
この新たなモデル式による実証実験場所でのアサリ個体数と HSI の関係を図 9.3-5 に示す。このモデル式を利用した結果、平均個体数と HSI の間に高い相関( $r=0.89$ )が得られた。なお、各項目の SI モデルは図 9.3-6 及び図 9.3-7 に示すとおりである。



※小長井と島原の各地点では底面摩擦速度を算出していないため、SI 底面摩擦速度=1.0 と仮定している。

図 9.3-5 HSI とアサリ成体分布密度との関係

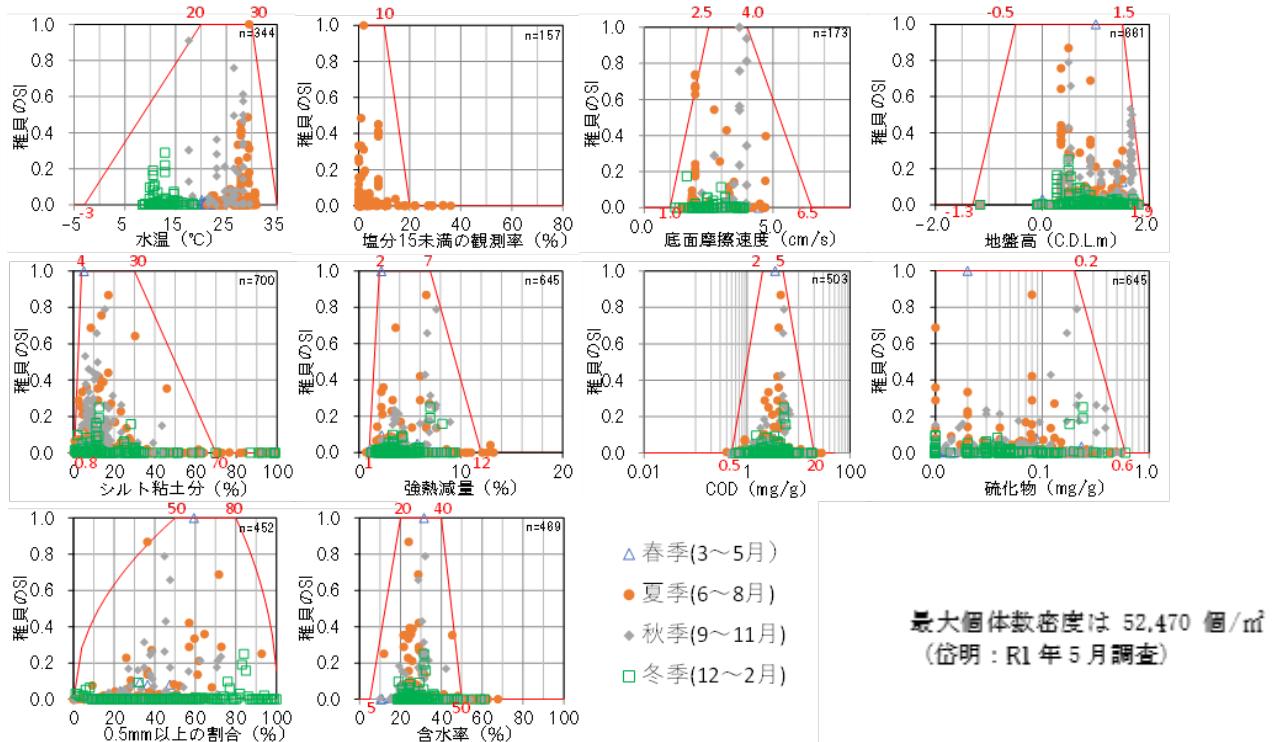
出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第7回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」



注)2013(平成25)～2017(平成29)年度の18地先(25か所)に、2018(平成30)～2019(平成31)年度の7地先(20か所)を加えたデータ。  
 図中のnは解析に用いたデータ数を示す。

図 9.3-6 アサリ成貝(殻長15mm以上)の分布密度から得られた各項目のSIモデル

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第7回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」



注)2013(平成25)～2017(平成29)年度の18地先(25か所)に、2018(平成30)～2019(平成31)年度の7地先(20か所)を加えたデータ。  
 図中のnは解析に用いたデータ数を示す。

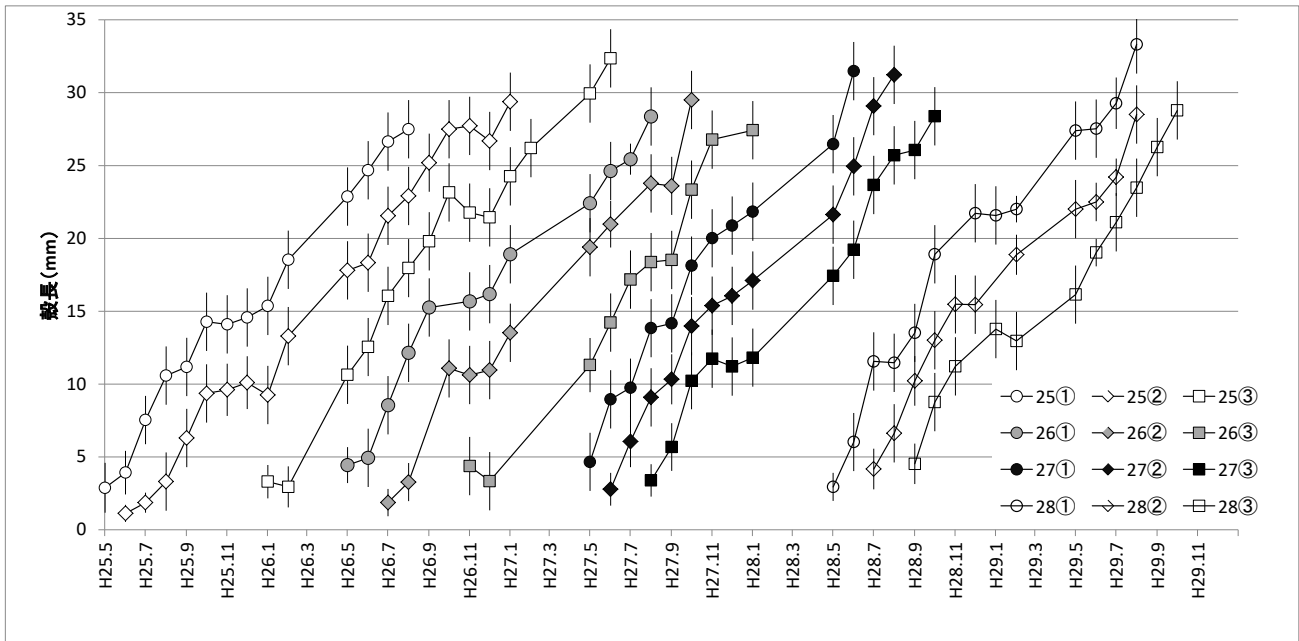
図 9.3-7 アサリ稚貝(殻長1～15mm)の分布密度から得られた各項目のSIモデル

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第7回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### (3) アサリの成長量の検討(全調査点の殻長組成の平均値による検討)

全地先の殻長組成平均値から求めた成長曲線を図 9.3-8 に示す。

各年度の殻長 5mm 以下の発生群を追跡調査した結果、1 年間で約 20mm (17.2~24.4mm) の成長が確認された。



参考文献:一般社団法人マリノフォーラム 21 ほか(2018)「平成 29 年度 各地域の特性に応じた有明海の漁場環境改善実証事業 報告書」

図 9.3-8 全地先の殻長組成平均値から求めた成長曲線

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### (4) 各地先のアサリ成長量と環境因子との関係

アサリ成長量と環境因子との関係は表 9.3-3 に示すとおりである。また、成長量と平均個体数及び夏季平均濁度との関係は図 9.3-9 に示すとおりである。

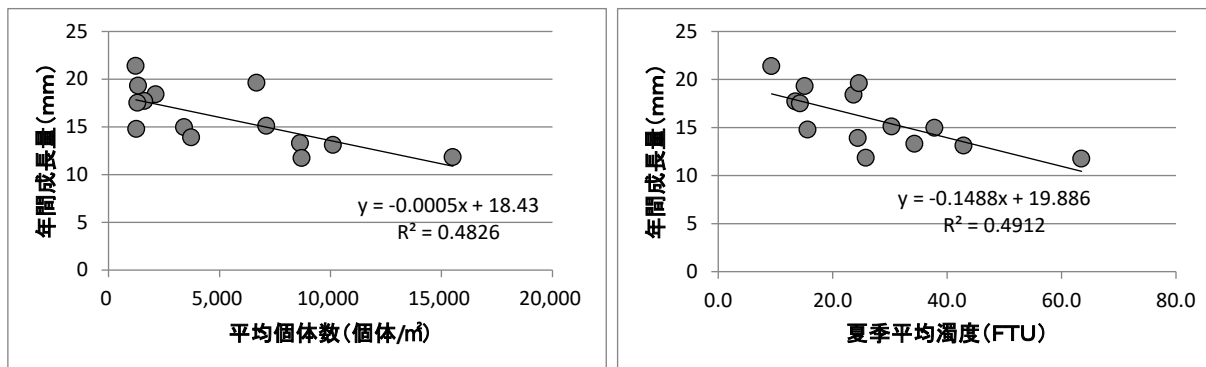
平均個体数の多い地先では成長が遅い傾向にあり、また、濁度の高い地先でも成長が遅い傾向がみられた。

表 9.3-3 アサリ成長量と環境因子との関係

項目	平均 個体数	クロロフィルa		濁度		水温		塩分		平均流速	
		夏季	冬季	夏季	冬季	夏季	冬季	夏季	冬季	夏季	冬季
相関係数	-0.69	0.27	0.32	-0.70	0.16	0.47	0.04	0.22	0.07	0.13	0.10

参考文献:一般社団法人マリノフォーラム 21 ほか(2018)「平成 29 年度 各地域の特性に応じた有明海の漁場環境改善実証事業 報告書」

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」



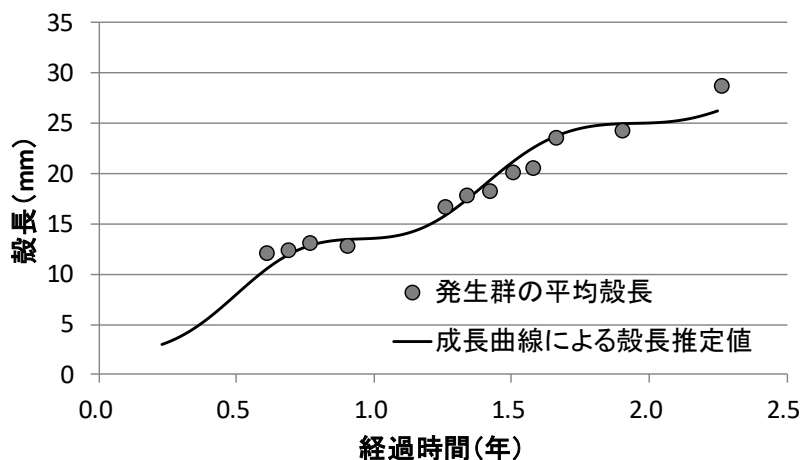
参考文献:一般社団法人マリノフォーラム 21 ほか(2018)「平成 29 年度 各地域の特性に応じた有明海の漁場環境改善実証事業 報告書」

図 9.3-9 成長量と平均個体数及び夏季平均濁度の関係

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第 4 回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### (5) アサリ成長量の検討(住吉地先着生区での回帰例)

アサリが高密度に着底している漁場である住吉地先着生区におけるアサリ成長量は図 9.3-10 に示すとおりである。住吉地先(着生区)では、約 1 年半で殻長 20mm、約 2 年半で漁獲サイズの 30mm に成長している。この結果からアサリが高密度に着生している漁場では、アサリの成長が遅れていることを考察した。



参考文献:一般社団法人マリノフォーラム 21 ほか(2018)「平成 29 年度 各地域の特性に応じた有明海の漁場環境改善実証事業 報告書」

図 9.3-10 住吉地先着生区におけるアサリ成長量

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第 4 回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

## 10. その他二枚貝類

### 10.1 アゲマキ資源再生の取組

アゲマキ *Sinonovacula constricta* は、国内で有明海と八代海のみに生息する固有種の二枚貝で、泥干潟の上部に殻の長さの7～8倍もある巣穴を掘って、その中で生活している。産卵期は9月下旬～11月上旬、盛期は10月上旬～中旬頃である。他の二枚貝同様に雌雄異体で、海水中で体外受精後にふ化し、浮遊幼生となる。この浮遊幼生が海中を漂う期間は他の貝類と比較すると短く(6日間前後)、殻長0.22mm前後で、底生生活を開始する。主な生息域は佐賀県から福岡県にかけてのA1海域となっている。

佐賀県内でのアゲマキ漁獲量の推移を図10.1-1示した。佐賀県沿岸において1909(明治42)年に漁獲量1万4千tを記録したが、1920(大正9)年後半以降は1千t未満に減少した。1988(昭和63)年に約700tの漁獲がみられたが、その年の8～9月に湾奥西部及び中部の養殖場で大量へい死がはじまり、約1ヶ月で漁場全域に、約3年で湾東部まで拡大し、カキ礁内部や河口感潮帯の天然個体群も含めて資源が消滅し<sup>1)</sup>、1994(平成6)年以降ほとんど漁獲がみられなくなった。養殖行為として造成された漁場が天然のアゲマキの生息に適していない地盤高の低い場所が多く、過大成長による生理的な失調<sup>1)</sup>が発生した可能性や、へい死個体からビルナウィルス<sup>2)</sup>の一種が検出されたことから感染症も疑われたが<sup>2)</sup>、現在までのところ、へい死原因を特定するに至っていない。

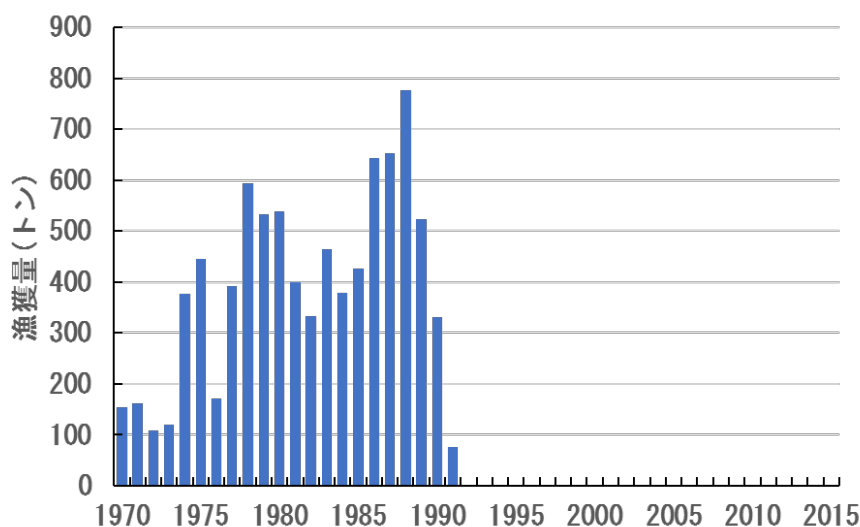


図 10.1-1 アゲマキの漁獲量の推移

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

#### 10.1.1 アゲマキ人工種苗生産の技術開発および放流

1994(平成6)年以降ほとんど漁獲がみられなくなったことから、佐賀県では1996(平成8)年から人工種苗生産の技術開発に、2003(平成13)年から人工稚貝の放流技術開発に着手し、2009(平成21)年から年間100万個体前後、累計で1,000万個体以上の稚貝を生産・放流し、母貝団地の造成に取り組んでいる。また、2018(平成30)年度からは福岡県内にも人工種苗生産された稚貝を移植あるいは放流し、母貝団地を造成している。母貝団地造成を軸としたアゲマキ

資源回復の概念図を図 10.1-2 に、具体的なアゲマキ人工稚貝の放流(母貝団地造成)場所を図 10.1-3 に示した。

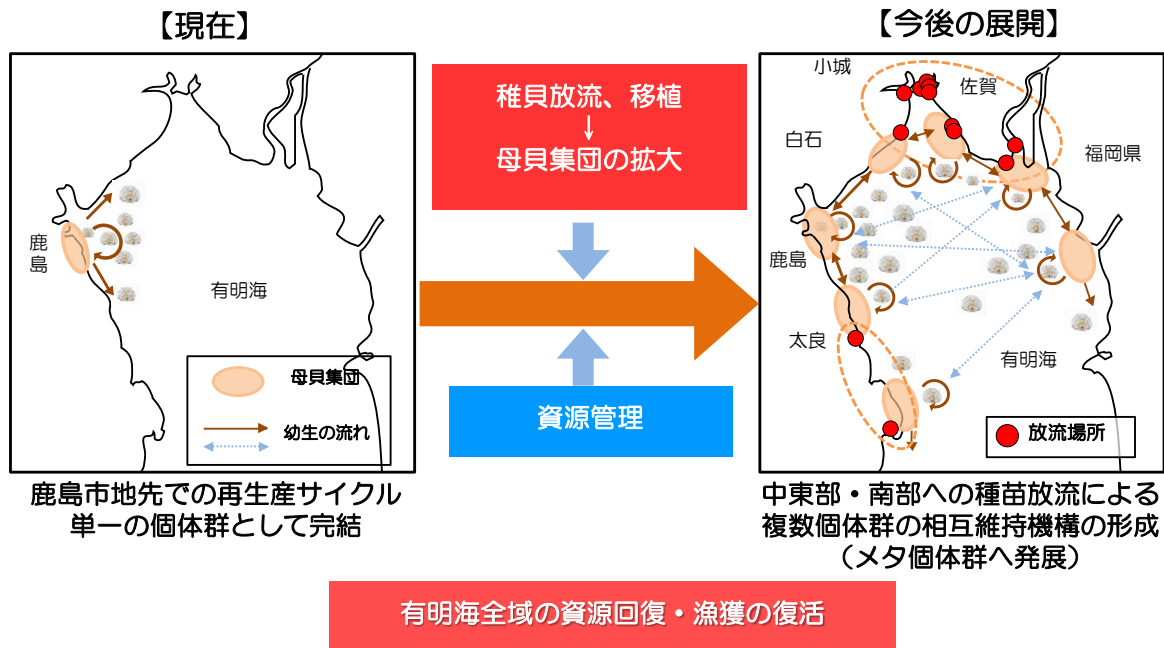


図 10.1-2 アゲマキ母貝団地造成による資源回復の概念図

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

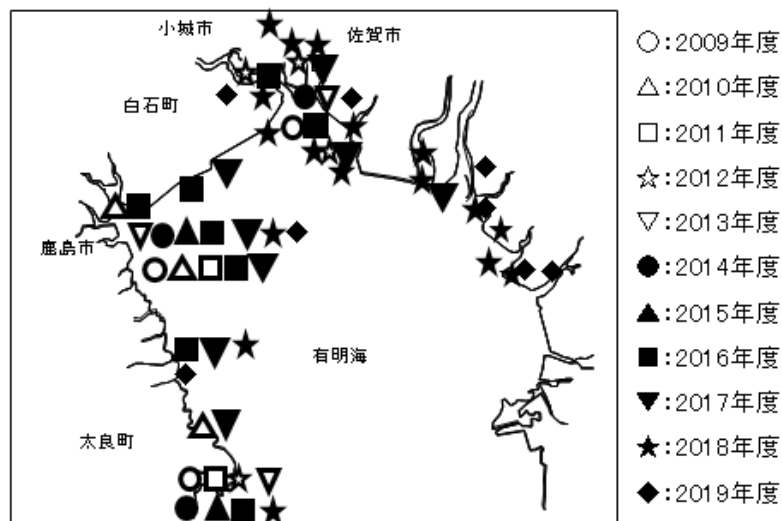


図 10.1-3 放流(母貝団地造成)場所

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### 10.1.2 アゲマキ放流後の資源量の変化

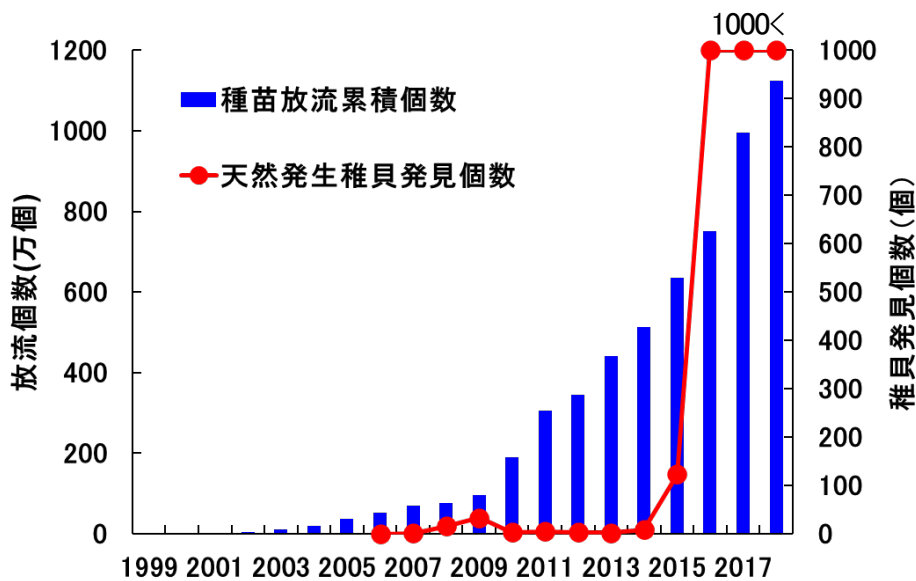
アゲマキ人工種苗の累計放流個数及び現地調査による天然稚貝発見個数を図 10.1-4 に示した。人工種苗を継続して放流してきた結果、放流貝から生まれ母貝団地の周辺に定着したと思われる天然稚貝が確認されるようになった。その発見個数については、2015(平成 27)年に



100 個体を超え、特に 2016(平成 28)年には 1,000 個体以上となった。アゲマキの発見地点及び 1 地点あたりの発見個数について図 10.1-5 に示した。アゲマキは 2008(平成 20)年以降、主に浜及び七浦地先で確認され、2010(平成 22)年以降は六角川以東でも確認されるようになった。浜・七浦周辺では、2008(平成 20)年～2010(平成 22)年に 1 地点あたり最大 28 個発見され、その後一旦は数個しか確認できないレベルに減少したものの、2015(平成 27)年には 1 地点あたり 100 個を超え、2016(平成 28)年には 500 個を超えるなど、急激な資源の増加が確認された。こうした資源の増加により、2018(平成 30)年 6 月に一部漁場において期間や人数等を制限したうえで、22 年ぶりにアゲマキ漁が再開され、824kg が漁獲・出荷された。

アゲマキは 22 年間漁獲報告がなかったが、人工種苗の放流により、資源の回復がみられた。このことから、1994(平成 6)年以降の資源の減少は、親貝資源の減少による資源の再生産サイクルの縮小が一つの要因であったと推定される。

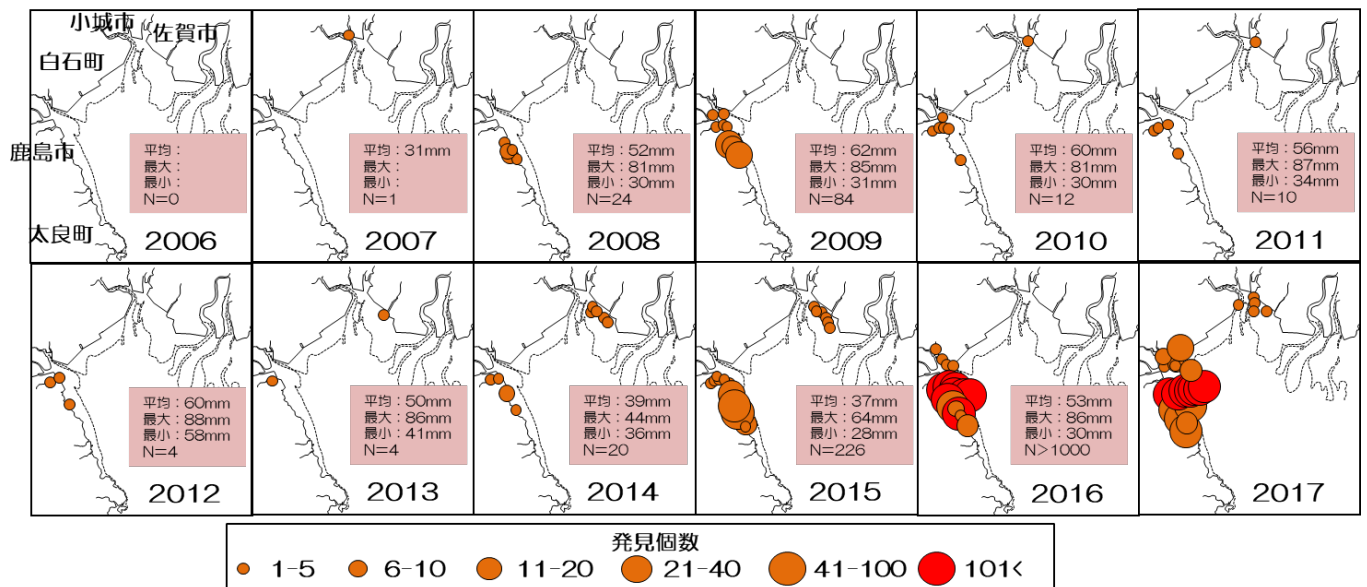
なお、2019(平成 31)年の冬期に、少雨による高塩分が原因とみられるへい死がみられ、生息範囲が縮小した結果(図 10.1-6)、2019(令和元)年のアゲマキ漁は見送りとなった。さらに、2020(令和 2)年の豪雨による生息域の低塩分でも大量死が発生し、回復途上にあった資源が大幅に減少した。今後もアゲマキの資源回復を目指し、稚貝の大量放流による母貝団地の造成を行うとともに、減耗の原因となる高塩分や低塩分を避ける放流手法・生息環境適地の評価について検討する必要がある。



参考文献:佃ほか(2017)「佐賀県有明水産振興センター研究報告」, 第 28 号, 47-49

図 10.1-4 累計放流個数と天然稚貝発見個数

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第 4 回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」



参考文献:佃ほか(2017)「佐賀県有明水産振興センター研究報告」, 第28号, 47-49

図 10.1-5 天然アゲマキ発見個数の推移

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

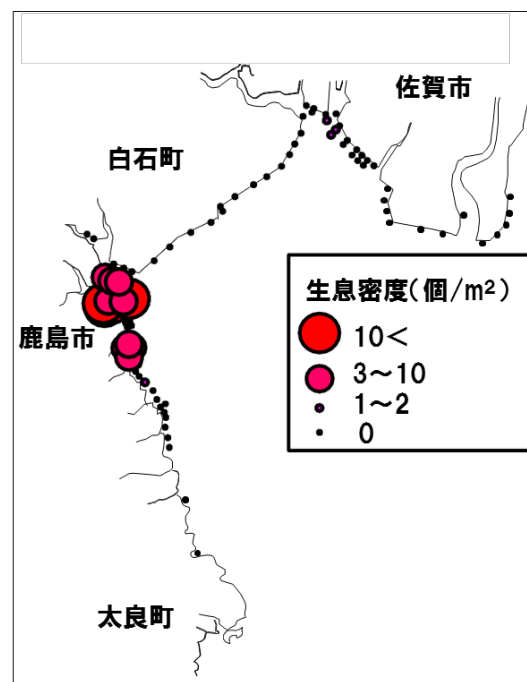


図 10.1-6 アゲマキ生息状況調査の結果(2019(平成31)年2~3月)

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

参考文献

- 1)吉本宗央(1998):有明海湾奥部におけるアゲマキ資源の変動. 水産海洋研究, 第62号, pp. 121-125.
- 2)Satoru Suzuki, Takuji Nakata, Maki Kamakura, Muneo Yoshimoto, Ysuhisa Furukawa, Yasuo Yamashita, Riichi Kusuda (1997): Isolation of birnavirus from Agemaki (Jack Knife Clam) *Sinonovacula constricta* and survey of the virus using PCR technique, Fisheries Science, Vol.63 No. 4, pp. 563-566.
- 3)佃政則, 神崎博幸, 津城啓子, 福元亨, 梅田智樹, 荒巻裕, 伊藤史郎(2017):佐賀県有明海沿岸におけるアゲマキ分布の変遷. 佐賀県有明水産振興センター研究報告, 第28号, pp. 47-49.

## 10.2 ウミタケ

ウミタケ *Barnea dilatata* の生息は、今日では有明海に限られる。有明海では、主に筑後川、早津江川の河口に近い干潟域から水深約 10m 付近の砂泥質域に生息している。水管が非常に発達しており、海底では殻から長く伸びた水管を通じて摂餌や呼吸を行っている。産卵期は春期、秋期の 2 回みられ、秋の方が主な産卵時期であると推定されている。

### 10.2.1 ウミタケ着底促進漁場の造成

ウミタケの資源の減少により、佐賀県では 2007(平成 19)年から休漁となっている。その後の調査により、ウミタケは浮遊幼生のステージまでは認められるものの<sup>1)</sup>、操業が再開されるほどのウミタケの発生がみられなかったことから、浮遊幼生の着底及びその後の生息環境に何らかの問題がある可能性が考えられた。そこで、2016(平成 28)年に図 10.2-1 に示した早津江川沖合に浚渫・盛土による着底促進漁場を試験的に造成し、底質改善が行われた。その結果、造成漁場において天然のウミタケが高密度に定着し、2017(平成 29)年には、試験操業が実施され、約 190 kg が漁獲された。

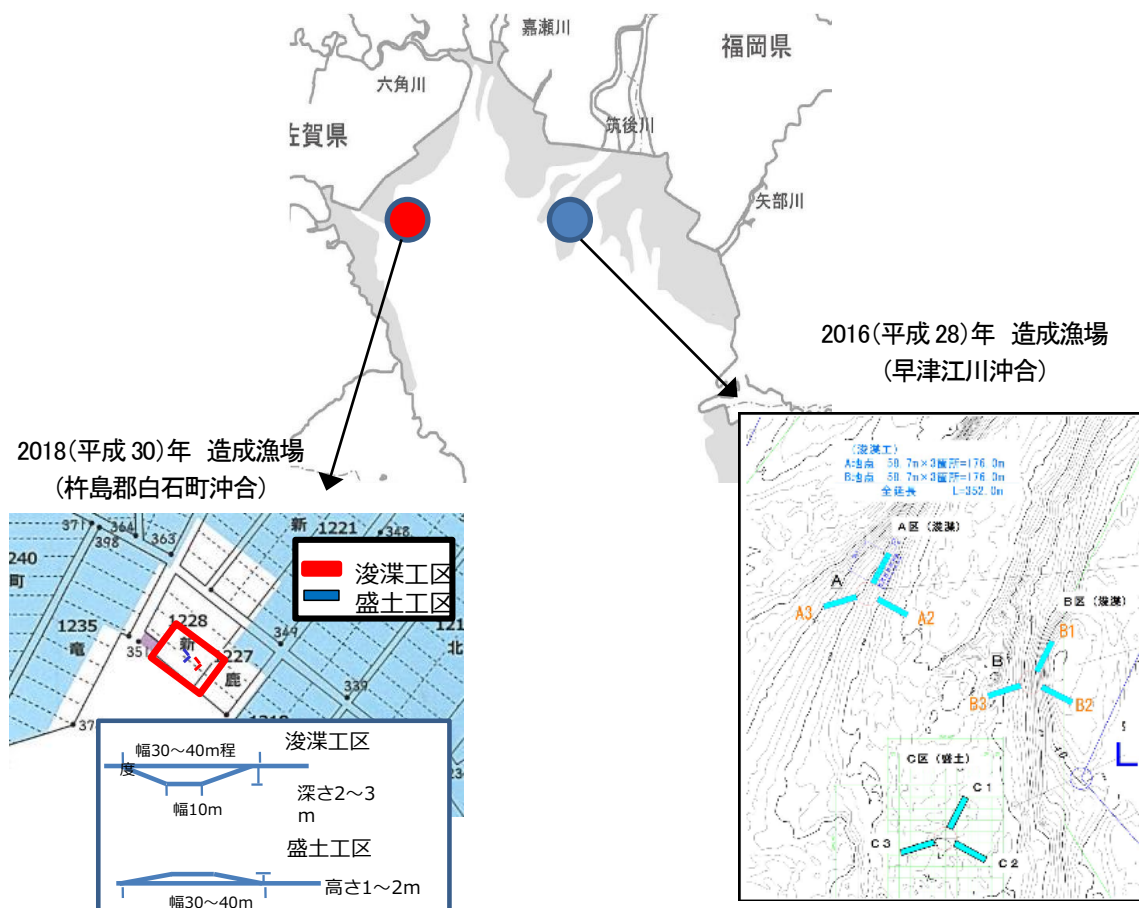


図 10.2-1 着底促進漁場位置

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

## 10.2.2 ウミタケ着底促進漁場の造成と人工種苗の放流

佐賀県では、2018(平成 30)年には杵島郡白石町沖合にも試験漁場を造成するとともに、人工種苗生産による稚貝の放流を実施した。2018(平成 30)年は、2016(平成 28)年度造成漁場に 75 千個、2019(令和元)年は、2016(平成 28)年度造成漁場に 93 千個、2018(平成 30)年度造成漁場に 93 千個、合計 186 千個の稚貝を放流した。

2018(平成 30)年、2019(令和元)年に造成漁場周辺の天然漁場において、試験操業を実施した結果、2018(平成 30)年は約 260 kg、2019(令和元)年は約 1,500 kg が漁獲された。造成漁場のウミタケが母貝となって浮遊幼生を供給することで、周辺の天然漁場に生息が拡大したものと考えられる。

底質改善を行った漁場近傍に親貝資源が見つからない状況の中、造成漁場にウミタケの着底がみられたのは、ウミタケ幼生の浮遊期間が、室内飼育試験の結果からおおよそ 40 日間前後であることから<sup>2)</sup>、他地域から浮遊幼生が早津江川河口域に供給されたと考えられる<sup>1)</sup>。

浚渫や盛土を行うことで、海底地形に変化を生み、また底質が改善されたことが、ウミタケの着底やその後の生残に良い影響をもたらしたと推定される。いずれにしても、ウミタケ浮遊幼生の着底条件と底質環境との関係について、さらなるデータの蓄積が必要であろう。一方で、豪雨の影響等もあり、2020(令和 2)年のウミタケ推定生息個数が減少したことから、試験操業は見送られており、安定的な種苗生産技術を開発するとともに、これまで造成した漁場や周辺海域において、浮遊幼生や稚貝の発生量調査を行い、資源造成効果を継続して調査する必要がある。

### 参考文献

- 1) 田 政則, 江口勝久, 伊藤史郎(2017): 早津江川河口域におけるウミタケ浮遊幼生量と稚貝発生量との関係, 佐賀県有明水産振興センター 研究報告, 第 28 号, pp. 85-87.
- 2) 伊藤史郎, 津城啓子, 山口忠則, 大隈 斉, 川原逸朗(2003): ウミタケの 浮遊幼生と稚貝飼育. 佐賀有明水振セ研報, 第 21 号, pp. 71-80.

## 11. エイ類等の食害生物の駆除・食害防止策

### 11.1 ナルトビエイ来遊量調査

水産有用二枚貝類への影響を把握するために、有明海沿岸4県(福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県)、水産庁、農村振興局が連携して、水産有用二枚貝類を捕食するナルトビエイの摂餌状況等の調査を実施している。

#### 11.1.1 調査の内容、方法

ナルトビエイを捕獲し、個体数、体盤長、湿重量、胃内容物の調査を実施した。調査期間、調査項目を以下に示す。

- ・調査期間:2006(平成18)年度～2019(令和元)年度 概ね4月下旬～11月
- ・調査項目:隻数、網入れ地点・回数、ナルトビエイの個体数、体盤長、湿重量、胃内容物(胃内容物については、2009(平成21)～2017(平成29)年度)

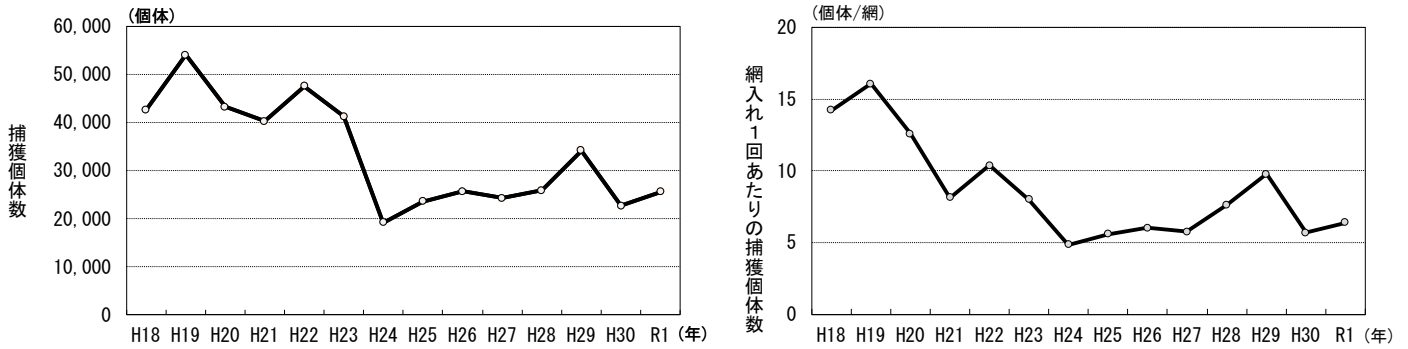
#### 11.1.2 ナルトビエイの捕獲状況、推定来遊量

ナルトビエイの捕獲個体数は、2008(平成20)～2011(平成23)年度は約4万個体(約400t)であり、2012(平成24)年度は約2万個体(200t)に減少し、以降、横ばい傾向にある(図11.1-1)。また、ナルトビエイの来遊量と関係性が強い CPUE<sup>※1</sup>も、捕獲個体数と概ね同様の傾向にある(図11.1-1)。

DOIRAP法<sup>※2</sup>によるナルトビエイの推定来遊量は、2008(平成20)～2010(平成22)年度には40～50万個体であり、2011(平成23)年度以降は減少し、2012(平成24)年度以降は概ね10～20万個体で推移している(図11.1-2)。

※1:CPUE(Catch Per Unit Effort):1網当たり(一定努力量当たり)の捕獲数

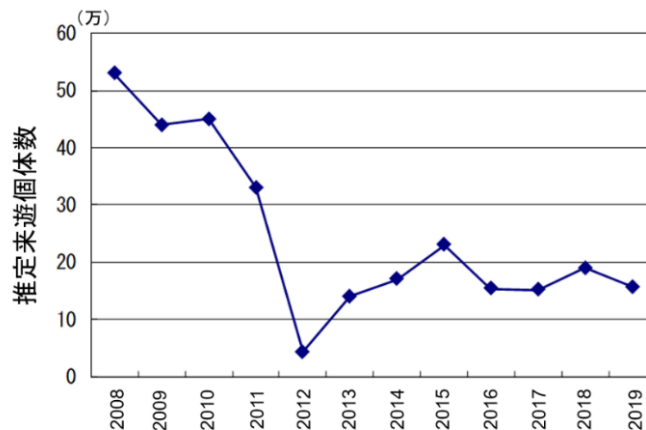
※2:DOIRAP法:捕獲されたナルトビエイのサイズデータをもとに、年齢構成、寿命、生残率、産仔数などの生態情報を加味して、年齢別の来遊量を推定する方法



注)1.2006(平成18)年:農政局調査+県単捕獲事業の集計値  
 2.2007(平成19)年~2019(令和元)年:農政局調査+県単捕獲事業+水産庁捕獲事業の集計値  
 3.捕獲個体数:ナルトビエイ以外の一部の食害生物を含んでいる可能性有  
 4.平成28年度委員会報告はサンプル数の少ない標本船調査のみによるCPUEを示しており、同じ年度であっても本調査結果と数字が異なることに留意

図 11.1-1 有明海におけるナルトビエイの捕獲個体数(左)及び1操業あたりのナルトビエイ捕獲数(CPUE、右)の経年変化

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第6回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」



注)2018(平成30)年度は体盤幅、生残率、混獲率、令和元年度は生残率、混獲率の調査を実施していないため、2015(平成27)~2017(平成29)年度の3カ年の平均値を使用してDOIRAP法で推定した。

図 11.1-2 ナルトビエイ推定来遊個体数の経年変化(DOIRAP法)

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第6回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

ナルトビエイの成長段階別の胃内容物の組成比率は表 11.1-1 に示すとおりである。ナルトビエイの胃内容物組成からは、アサリ、サルボウ、タイラギなどの水産有用二枚貝類に一定の被害を及ぼしていることが確認できた。なお、胃内容物中にタイラギが確認された調査年度は、2009(平成21)、2011(平成23)、2015(平成27)年度の3カ年のみでごくまれであった。1日の摂餌量は、各個体の体重に占める胃内容物重量の割合で0歳は0.9%、19歳は0.2%であり、大型になるほど低下する傾向にあった。



表 11.1-1 ナルトビエイの成長段階別の胃内容物の組成

成長段階	調査年度	水産有用二枚貝類(%)				カキ(%)	その他の二枚貝(%)	巻貝(%)	その他(%)	個体数(n)	平均体盤幅(cm)
		アサリ	サルボウ	タイラギ	小計						
幼魚	2009	5.6	16.7	0.0	22.3	0.0	18.9	53.6	5.1	30	48
	2010	7.3	7.1	0.0	14.4	0.0	33.0	41.8	10.8	41	43
	2011	8.2	34.6	0.0	42.8	0.0	16.3	34.8	6.1	49	46
	2012	1.7	0.0	0.0	1.7	0.0	17.6	61.0	19.6	59	44
	2013	4.5	70.9	0.0	75.4	0.8	11.3	5.0	7.6	40	48
	2014	43.0	3.4	0.0	46.4	0.0	42.7	8.6	2.4	35	42
	2015	21.0	12.9	0.0	33.9	0.0	32.4	26.2	7.5	29	45
	2016	0.0	62.4	0.0	62.4	0.0	0.0	25.0	12.6	8	48
	2017	0.0	2.9	0.0	2.9	0.0	34.3	30.9	23.5	35	44
平均	10.1	23.4	0.0	33.6	0.1	22.9	31.9	10.6	—	—	
未成魚	2009	19.4	36.8	3.0	59.2	8.8	21.4	0.0	10.7	67	72
	2010	42.6	14.3	0.0	56.9	0.0	17.0	5.7	20.4	58	72
	2011	20.5	58.8	0.3	79.6	9.3	6.2	2.8	2.1	64	69
	2012	31.1	9.1	0.0	40.2	30.4	14.7	14.6	0.1	55	69
	2013	5.9	56.6	0.0	62.5	13.3	22.8	0.0	1.4	72	68
	2014	42.2	40.0	0.0	82.2	12.2	3.9	0.0	1.7	72	72
	2015	19.5	13.9	0.0	33.4	21.5	25.6	13.9	5.6	36	72
	2016	4.6	62.0	0.0	66.6	6.2	14.7	8.2	4.4	25	71
	2017	14.5	29.8	0.0	44.2	21.2	28.6	0.2	1.8	26	71
平均	22.2	35.7	0.4	58.3	13.7	17.2	5.0	5.3	—	—	
雄成魚	2009	22.9	43.0	0.0	65.9	1.2	32.9	0.0	0.0	9	88
	2010	44.4	28.1	0.0	72.5	0.0	9.1	9.1	9.3	11	87
	2011	3.7	67.8	0.0	71.5	8.8	5.6	0.0	14.0	27	87
	2012	1.4	11.4	0.0	12.8	77.2	10.0	0.0	0.0	10	82
	2013	0.0	66.7	0.0	66.7	11.1	22.2	0.0	0.0	9	83
	2014	7.7	75.9	0.0	83.6	9.4	6.3	0.2	0.5	32	86
	2015	14.3	14.8	0.0	29.0	27.6	42.4	0.0	0.9	14	87
	2016	0.0	42.5	0.0	42.5	23.2	32.6	1.4	0.3	12	86
	2017	0.0	25.1	0.0	25.1	37.3	36.7	0.0	0.9	8	85
平均	10.5	41.7	0.0	52.2	21.8	22.0	1.2	2.9	—	—	
雌成魚	2009	0.0	29.1	18.9	48.0	23.6	7.0	0.0	21.4	15	111
	2010	57.2	21.5	0.0	78.7	15.9	0.2	0.8	4.5	12	103
	2011	7.7	43.0	0.0	50.7	41.1	0.0	1.0	7.2	12	112
	2012	7.1	11.4	0.0	18.6	67.2	0.0	7.1	7.0	14	108
	2013	0.0	83.4	0.0	83.4	16.6	0.0	0.0	0.0	12	110
	2014	0.0	60.8	0.0	60.8	26.3	8.7	4.0	0.1	23	109
	2015	0.1	5.1	15.3	20.5	56.0	16.6	6.3	0.7	16	105
	2016	0.0	1.1	0.0	1.1	78.6	20.0	0.0	0.3	5	101
	2017	0.0	9.9	0.0	9.9	48.9	28.5	3.9	8.8	10	120
平均	8.0	29.5	3.8	41.3	41.6	9.0	2.6	5.6	—	—	

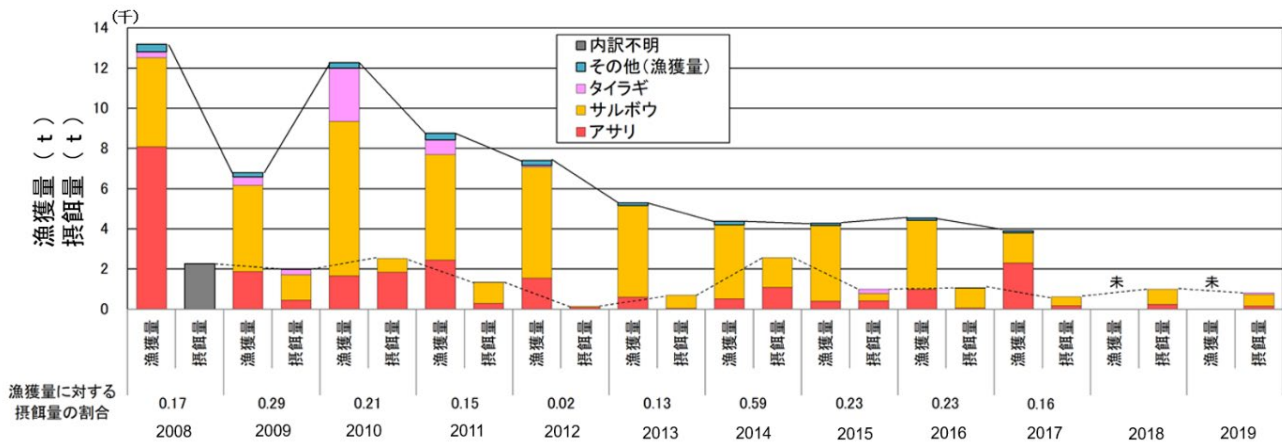
注)1.幼魚:体盤55cm未満、未成魚:体盤55~80cmの雄と体盤55~94cmの雌、成魚:体盤80cm以上の雄と体盤94cm以上の雌

2.表中の赤マスは50%以上、淡赤は20%以上を示す。

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第6回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### 11.1.3 ナルトビエイの摂餌量の推定

2008(平成 20)年度から 2019(令和元)年度までの、有明海における水産有用二枚貝類漁獲量と調査結果に基づくナルトビエイの摂餌量の経年変化を図 11.1-3 に示す。胃内容物組成と量、推定来遊量から推定した水産有用二枚貝類の摂餌量は 2008(平成 20)～2010(平成 22)年度の 2,000～2,500t から、2012(平成 24)年度の 200t 以下に減少したが、2013(平成 25)年度以降は 1,000t 程度で横ばいの状況にある。ナルトビエイの摂餌量の大半を占めるサルボウは漁場外での摂餌も見られるとの研究成果があるものの、ナルトビエイの水産有用二枚貝類の摂餌量は漁獲量の 13～59%に相当し、漁獲量が年々減少している水産有用二枚貝類にとって、その摂餌の影響は小さくないといえる。



注) 1.漁獲量データは『九州農林水産統計年報(九州農政局統計部)』より抜粋

2.2008(平成 20)年度は胃内容物調査を実施していないため内訳は不明

3.2018(平成 30)年度、2019(令和元)年度は胃内容物調査を実施していないため、2015(平成 27)～2017(平成 29)年度の3ヵ年の平均値を使用して摂餌量に占める水産有用二枚貝類の比率を算出した。

図 11.1-3 水産有用二枚貝類漁獲量とナルトビエイによる摂餌量の経年変化

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第6回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

## 11.2 ナルトビエイ以外の小型捕食者による食害

環境省では、ナルトビエイよりも小型の動物の捕食によってタイラギ移植個体の生残率がどの程度減少するか、また、その対策をどう講じるかについて検討した。まず、2017(平成 29)年度にどの程度の目開きのケージによってタイラギ移植個体を保護すれば、生残率を高く保てるかを試験した。次に、2018(平成 30)年度に、タイラギ移植個体の生残率の時系列変動様式が小型捕食動物からの保護の有無に応じてどのように変化するかを試験し、あわせて、タイラギ捕食の可能性の高い小型動物を水中カメラで撮影した。

### 11.2.1 調査の内容・方法

有明海における浮遊幼生ネットワークの形成においては、湾奥部だけでなく中南部における母貝団地も必要となりうることから、図 11.2-1 に示した湾奥の 3 定点(大牟田、沖神瀬西、野崎干潟)と中南部の 2 定点(三会、爛場島)を試験海域として設定した。2017(平成 29)年度には大牟田と三会で試験し、2018(平成 30)年度には全定点で試験した。各定点の緯度・経度と水深は表 11.2-1 に示すとおりである。



図 11.2-1 移植試験の定点

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

表 11.2-1 定点の位置と水深

定点	北緯 (°)	東経 (°)	水深 (m)
大牟田	33.02933	130.36556	10.0
沖神瀬西	33.06250	130.22167	12.7
野崎干潟	32.97768	130.21942	2.2
三会	32.82721	130.36246	13.5
爛場島	32.77361	130.37953	9.3

野崎干潟は潮間帯、他定点は潮下帯に位置する。

#### (1) 保護ケージの目開きによるタイラギ移植個体の生残率の変化(2017(平成 29)年度)

小型捕食者に対する目開きの検討:底面50cm×50cm、高さ30cmの箱型のステンレス製ケージ(上面と側面はステンレス製メッシュ、底面は空洞)を大牟田と三会に3つずつ潜水士が設置した。各ケージを高さが半分(15cm)になるように海底に埋め込んだ。各定点における3ケージの目開きは1、2、3cmの3種類である。

設置日は2017(平成 29)年8月18-19日にかけて実施したが、大牟田の3cm目開きのケージのみ2017(平成 29)年8月30日とした。

各ケージの内部にタイラギ人工種苗 1 才貝(殻長の平均±標準偏差:9.7±1.7cm)を 14 個体ずつ移植した。この人工種苗は前年度に有明産親貝から生産されたものである。

各ケージを約 2 週間間隔でダイバーが清掃した。これらのケージと内部の生残個体を 2017(平成 29)年 10 月 26-27 日に回収した。各ケージについてタイラギの生残率を計算し、さらにこの値を移植日数の代表値(69 日間)における生残率へと補正し、目開きや定点間の比較検討を行った。

## (2) タイラギ移植個体の生残率の時系列変動と捕食性小型動物の観察(2018(平成 30)年度)

定点(大牟田、沖神瀬西、野崎干潟、三会、爛場島)に 2 タイプのケージを 3 個ずつ設置し、内部にタイラギ人工種苗 1 才貝を 20 個体ずつ移植した。移植時の殻長は 9.4±0.9 cm(平均±標準偏差)であった。

これらの定点に設置したケージは、図 11.2-2 のステンレス製の「保護ケージ」とネトロンネット製の「低保護ケージ」である。各ケージの形状は、2017(平成 29)年度のケージと同様に底面 50cm×50cm、高さ 30cm の箱型である。これらのケージの底面は空洞で原地盤の底質となっており、側面と上面は目開き 1.5cm であり、2017(平成 29)年度の試験結果から捕食性の小型動物の侵入を完全に防ぎ、かつタイラギの生残率に負の影響を与えない目開きである。低保護ケージでは、上面を目開き 11.5cm のネットに交換した。11.5cm の目開きは多くの小型動物の侵入がみられるものの、ナルトビエイなど大型のエイ類の侵入を防ぐと考えられる目開き(熊本県水産研究センター,2017)として設定した。



図 11.2-2 保護ケージ(左)と低保護ケージ(右)

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

これらのケージに 2018(平成 30)年 5 月 31 日～6 月 6 日にタイラギ人工種苗を 20 個体ずつ移植した。移植の直後に各ケージに 1.5cm 目開きの蓋をした。移植したタイラギが自ら底質に潜り込んで固着するまでの馴致として、移植したタイラギを約 2 週間そのままにしたのち、低保護ケージだけに 2 週間後に蓋の目開きを 1.5cm から 11.5cm へと拡大し、観察を開始した。各ケージは 2 週間ごとに潜水土が清掃するとともに、各ケージ内部の底質を潜水土が触診することで、人工貝の生残個体を計数した。2018(平成 30)年 10 月 16～26 日にかけてケージ内の全

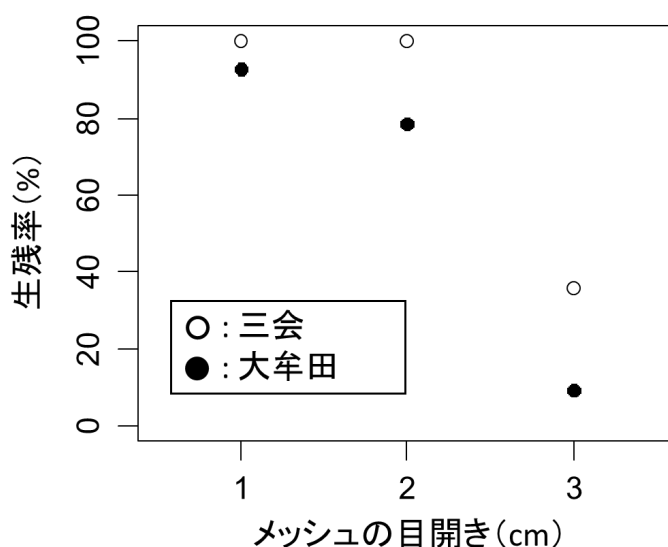
個体を回収し、最終生残個体を計数した。この最終日の生残個体数から移植期間中の生残率を計算し、移植日数の代表値(135日間)で補正した。

低保護ケージの蓋の目開きを拡大した日に、タイムラプスカメラ(Brinno TLC200Pro)を低保護ケージ1つの前に約50cmの距離を離して設置し、5:00~20:00の時間帯に20秒間隔で撮影した。各定点についてカメラ設置の翌日から数えて8~12日分の画像を解析し、ケージ周辺に出現した生物種と個体数を計数した。

## 11.2.2 調査結果

### (1) 保護ケージの目開きによるタイラギ移植個体の生残率の変化(2017(平成29)年度)

大牟田と三会の各定点におけるタイラギ移植個体の生残率(69日あたり補正值)は、1-2cmの目開きのケージでは79~100%と高かった一方、3cm目開きのケージでは9-36%と低かった(図11.2-3)。



注)タイラギ移植個体の生残率と、ケージのメッシュの目開きとの対応を示した。生残率は69日間あたりに補正した値。

図 11.2-3 2017(平成29)年度の移植実験結果

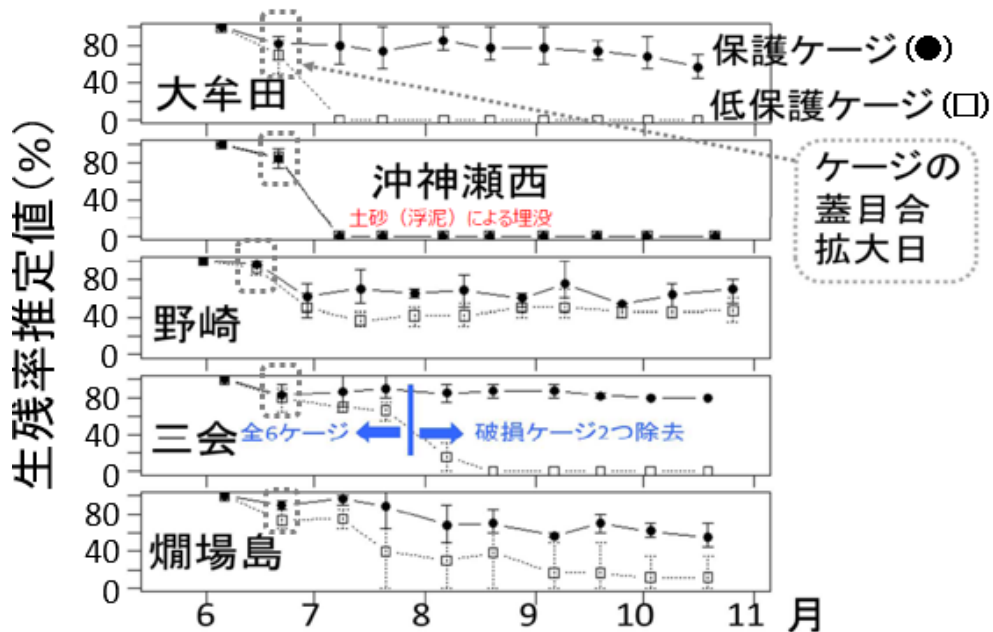
出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### (2) タイラギ移植個体の生残率の時系列変動と捕食性小型動物の観察(2018(平成30)年度)

潜水士によるタイラギ生残推定値(触診による推定値)を図11.2-4に示した。低保護ケージと保護ケージの間での生残率推定値の差は、沖神瀬西を除く各定点で、目開き拡大の調査日以降、広がった。このような差の広がる速度は、大牟田で最も高く、次いで三会・爛場島で顕著であり、野崎干潟では低かった。一方、沖神瀬西では、目開き拡大の調査日から次の調査日にかけて、低保護ケージ・保護ケージともに生残率が0%にまで急減した。調査最終日の回収生残個体数に基づく生残率(135日あたり補正值)に関するケージタイプ間の差は、定点ごとに有意に異なった(混合型ロジスティック回帰におけるケージタイプと定点の交互作用: $p < 0.001$ )。同生残率のケージタイプ間の差は、大牟田(保護ケージの平均生残率70%、低保護ケージの平



均生残率 0%)、三会(95%、0%)、爛場島(63%、3%)では有意であり、野崎干潟(86%、64%)、沖神瀬西(0%、0%)では有意でなかった(定点別の混合型ロジスティック回帰におけるケージタイプ効果:有意水準0.05)。



注)横軸に調査日、縦軸に生残率推定値(潜水土の現場推定に基づく)を示した。各定点、調査日、ケージタイプについて、平均値(●:保護ケージ、□:低保護ケージ)とレンジ(縦棒)を示した。

図 11.2-4 2018(平成 30)年度のタイラギ移植実験の結果

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

水中カメラで撮影された小型動物について、出現率(当該生物の記録された写真の枚数÷全ての写真の枚数)を表 11.2-2 に示した。出現率が相対的に高い種を定点別に整理すると、大牟田ではアカニシ(12.9%)とイシガニ(3.6%)、沖神瀬西ではイシガニ(0.4%)、野崎干潟ではイシガニ(5.3%)、三会ではタコ類(0.11%)、爛場島ではタコ類(0.31%)とアカニシ(0.18%)となった。エイ類は三会だけで記録され、その出現率は低かった(0.0044%)。なお、沖神瀬西では、設置日から9日目(2018(平成30)年6月29日)に水中カメラが横転し、泥に埋没した。これ以降の各調査日において、潜水土が定規により測定した泥の厚み(最初にケージを設置した海底の表面と、泥の表面との距離)の中央値は、沖神瀬西では38cm、他の定点では0.5cm~5.0cmだった。沖神瀬西ではすべてのケージが急激な泥の堆積によって埋没したことにより全タイラギ個体が死亡していたが、その原因として、2018(平成30)年6月29日の九州北部での豪雨(120.5mm/日)と強い北風(最大風速:11.4m/秒)が想定される。



表 11.2-2 水中カメラの日中撮影時間における小型捕食者の出現率

定点	アカニシ	タコ類	イシガニ類	エイ類	クロダイ
大牟田	12.9%		3.6%		
沖神瀬西			0.4%		
野崎干潟			5.3%		0.022%
三会		0.11%		0.0044%	0.021%
爛場島	0.18%	0.31%	0.014%		

出典:環境省(2019)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第4回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### 11.2.3 まとめ

近年のタイラギ減少要因として、ナルトビエイ以外の生物による食害報告も多くみられる。タイラギを摂餌する生物としては、相対的に小型の捕食者(イシガニやガザミ等の大型の甲殻類、イダコやマダコ等の頭足類、アカニシ等の腹足類)が知られている(平成 28 年度委員会報告)。

2017(平成 29)年度と 2018(平成 30)年度の試験結果から、ナルトビエイよりも小型の動物の食害により、殻長約 10cm のタイラギ1才貝の生残率が大きく低下することが考えられた<sup>1)</sup>。これらの原因生物として、肉食性の巻貝、甲殻類、頭足類の影響が推定された。ただし、タイラギ移植個体に対する小型捕食者ごとの食害率を定量的に評価できていない。また、移植試験は周囲にタイラギが存在しない条件下で人為的に高密度に移植されているため、移植タイラギが集中的な食害を受ける可能性が高く、その影響を過大評価している可能性もあり、有明海全体で評価するには情報不足である。

### 参考文献

- 1)Kurihara, T., Hashimoto, K., Nakano, S., Matsuyama, Y., Yurimoto, T., Nagasoe, S., Ito, A., Ojima, D., Okamura, K. (2021): Effects of transplant sites and preventive measures against predation on the survival rates of pen shell in the Ariake Sea, Japan, *Plankton and Benthos Research*, Vol. 16, pp. 266-277.

## 12. 環境負荷の軽減に配慮したノリ色落ち軽減技術の開発

### 12.1 二枚貝類養殖等を併用したノリ色落ち軽減技術の開発

水産庁では、環境負荷の軽減に配慮したノリ生産のために、福岡県、佐賀県、熊本県とともに、二枚貝類を活用したノリの色落ち軽減技術開発に取り組んだ。有明海及び八代海のノリ養殖施設周辺で二枚貝類(アサリとカキ)の増養殖試験を実施することにより、二枚貝のろ水摂餌による色落ち原因プランクトンの除去効果や排泄に伴う栄養塩供給によるノリの品質向上効果を検証した結果について述べる。対象海域は、福岡県地先有明海(A1 及び一部 A2 海域)、佐賀県地先有明海(A1 及び一部 A3 海域)、熊本県地先有明海(A4 海域)及び八代海奥部(Y1 海域)で実施されたものである。

#### 12.1.1 福岡県地先有明海における二枚貝増養殖によるノリ養殖の高品質化

ノリ漁場にアサリの放流区と対象区を設け、アサリの分布密度、肥満度、海水中の栄養塩濃度、ノリの色調(L\*値、ノリの品質を評価する値の一つで、数値が低いほど黒みが強く品質がよい。小谷 2000)を比較した。調査結果は図 12.1-1 に示すとおりである。試験期間中の海水中のアンモニア態窒素濃度はアサリ放流区でやや高い傾向にあり、アサリによる栄養塩の放出効果が示唆された。ただし、ノリの色調は、アサリ放流区と対照区間で大きな差異はみられなかった。

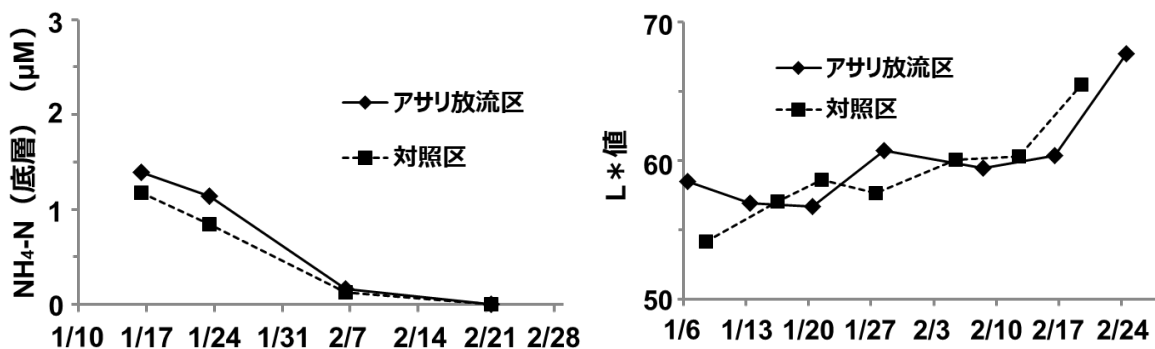


図 12.1-1 ノリ養殖漁場でのモニタリング結果

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

また、港内の浮き桟橋に、アサリを収容したカゴ(アサリ収容区)と砂のみを入れたカゴ(対象区)を垂下し、クロロフィル a 濃度や栄養塩濃度を比較した。結果を図 12.1-2 に示した。アンモニア態窒素濃度は、アサリ収容区の方が有意に高く、アサリの排泄による栄養塩濃度の上昇効果がみられた。また、クロロフィル a 濃度は、アサリ収容区の方が  $3\mu\text{g/L}$  以下で推移するなど低い傾向を示し、アサリのろ水活動によって植物プランクトンが除去されたと考えられた。

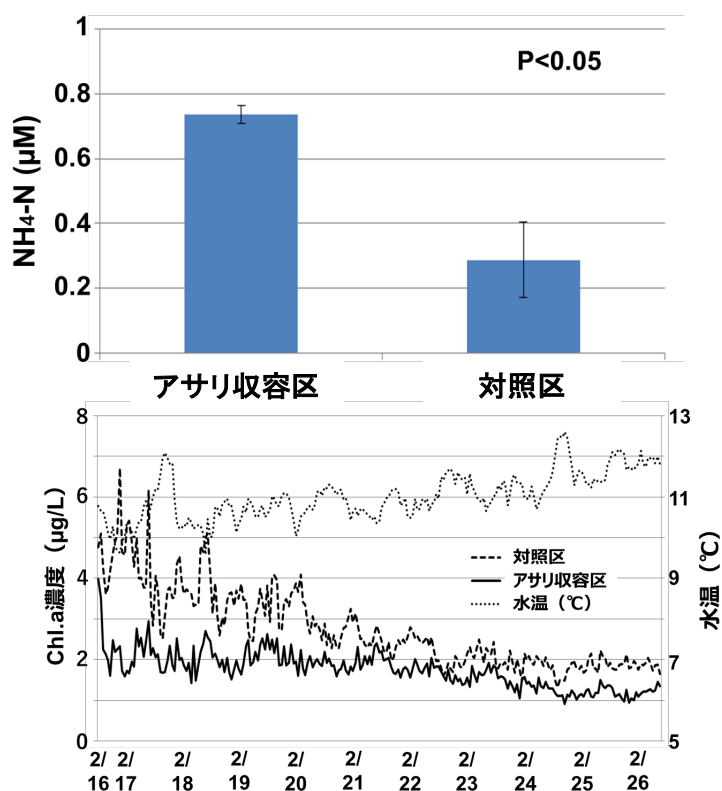


図 12.1-2 垂下カゴを用いた現場実証試験の結果

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### 12.1.2 佐賀県地先有明海における二枚貝増養殖によるノリ養殖の高品質化

2017(平成29)年度に佐賀県地先有明海の佐賀県太良町地先のノリ養殖施設周辺において、図 12.1-3 に示す試験容器を設置し、マガキとノリの複合養殖試験を実施した。試験は閉鎖区、半閉鎖区、流水区に、ノリ+二枚貝(6 kg①、2.5 kg③)と二枚貝(6 kg②、2.5 kg④)のみを組み合わせた12試験区で複合育成効果を調べた。

植物プランクトンの細胞密度及びL\*値の推移を図 12.1-4 に示す。マガキを収容した閉鎖区及び半閉鎖区で植物プランクトンの細胞密度が低密度で推移する傾向にあり、カキの摂餌による植物プランクトンの除去効果が確認された。また、マガキを収容した閉鎖区および半閉鎖区でL\*値が低い値で推移する傾向にあり、マガキとの複合養殖によるノリの色落ち軽減効果が確認された。

2018(平成30)年度は、半閉鎖区に、ノリ+二枚貝(2.5 kg、4 kg、6 kg)を各3例で実施し、二枚貝の収容量の違いによるノリの色落ち軽減効果への影響を検証した。ノリのL\*値の推移を図 12.1-5 に示す。二枚貝の収容量が4kg以上の場合、L\*値が一定もしくは緩やかに減少し、ノリ

の色調が保持されることが示された。この結果より、ノリの色落ち回復のために必要となる二枚貝の量を試算した。

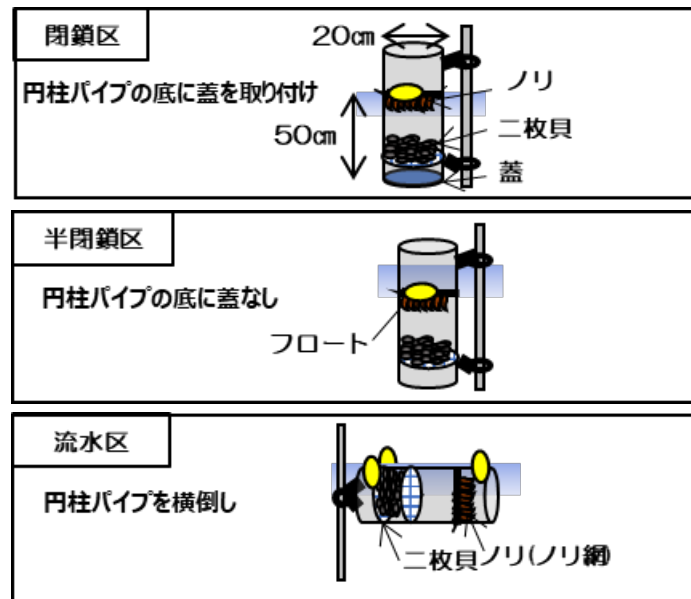


図 12.1-3 試験容器の概要図

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

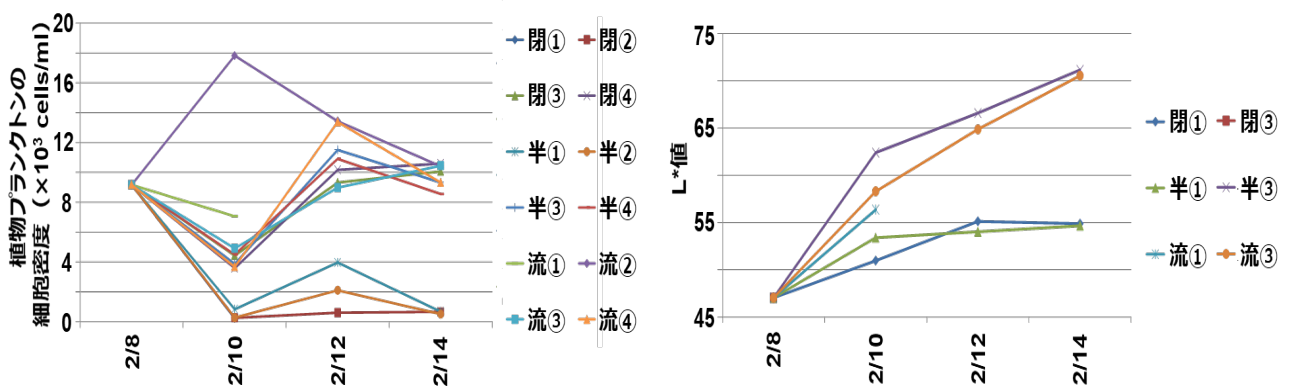


図 12.1-4 試験中の植物プランクトン細胞密度及びノリのL\*値の推移

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

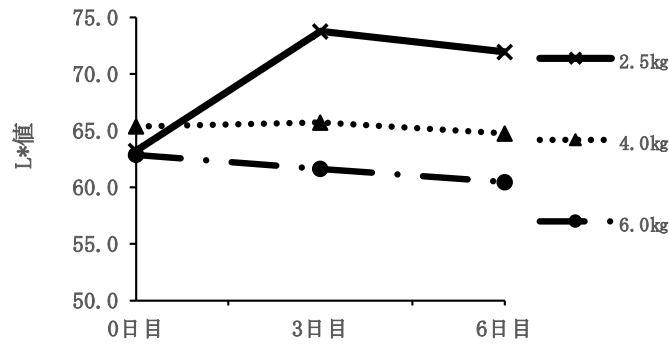


図 12.1-5 試験中のノリのL\*値の推移

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

### 12.1.3 熊本県地先有明海・八代海における二枚貝増養殖によるノリ養殖の高品質化

マガキ養殖が熊本県地先有明海及び八代海のノリ養殖漁場における栄養塩の動向と珪藻類の発生に与える効果について検討を行った。玉名市横島町地先(有明海 A4 海域)における試験のうちノリ養殖漁場でのマガキ垂下養殖試験を図 12.1-6 に、ノリとマガキを併用した試験養殖は図 12.1-7 に示した。ノリ養殖漁場でのマガキ垂下養殖試験の結果、試験養殖筏外の潮上(St.1)よりも潮下(St.5)でクロロフィル濃度が減少する事例が確認され、マガキによる植物プランクトンの除去効果が示唆された。

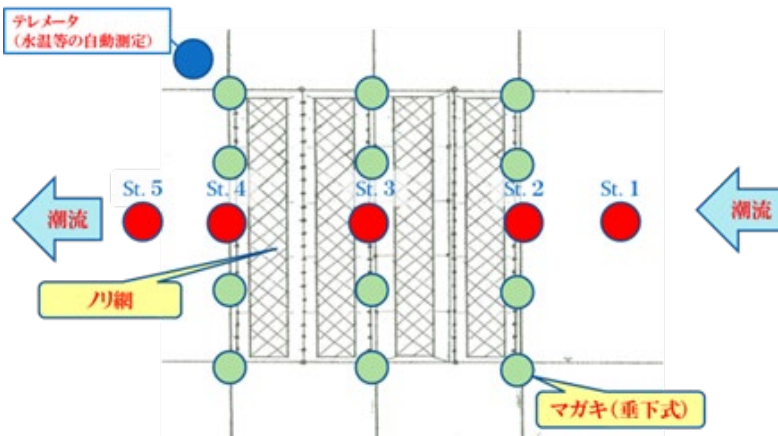


図 12.1-6 ノリ養殖漁場でのマガキ垂下養殖試験(玉名市地先)

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

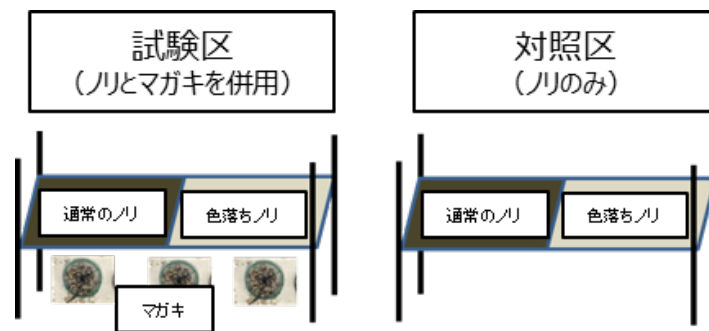


図 12.1-7 ノリとマガキを併用した試験養殖

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

また、ノリとマガキを併用した試験養殖を行ったところ、いずれの試験区でも栄養濃度の低下に伴い通常色調のノリの色落ちが発生したが、マガキと併用した場合には、既に色落ちしたノリの色調には変化がなく、色落ちが進行しなかった。

さらに、熊本県八代市鏡町地先(Y1 海域)に設置したマガキ養殖筏近傍で観測された流向・流速、クロロフィル a 濃度の連続観測データ等を基に、マガキ養殖施設におけるクロロフィル a の収支を推定した(図 12.1-8)。養殖容積 700 m<sup>3</sup> で約 6,600 個体のマガキを養殖した場合のクロロフィル a の収支の推定結果から、植物プランクトンの現存量の増加を 4.5%抑制する効果があると推定された。

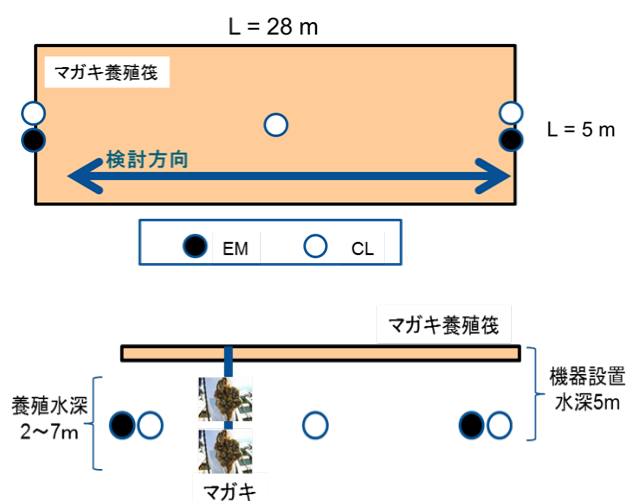


図 12.1-8 マガキ養殖施設におけるクロロフィル a の収支試験の状況

出典:環境省(2020)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第5回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

以上のように、有明海及び八代海のノリ養殖施設周辺において、二枚貝(アサリ、マガキ)とノリとの複合増養殖試験を行い、二枚貝の摂餌による植物プランクトンの除去効果や二枚貝の排泄による栄養塩濃度の上昇効果を確認した。ただし、潮汐等によって常に海水が流動する開放系のノリ漁場内部で有意な色落ち被害の軽減を図るためには、通常天然二枚貝の生息密度をはるかに超える二枚貝の存在が必要であること、また、マガキ等の養殖を併用した場合であっても、それによる植物プランクトンの除去あるいは栄養塩の放出効果により、ノリの色落ち被害を十分に回復させることは難しいことに留意が必要である。一方で、海域全体の物質収支を考慮すれば、二枚貝資源の増加がノリの安定的な生産に貢献する可能性が示された。二枚貝の摂餌による色落ち原因プランクトンの除去や排泄に伴う栄養塩供給によるノリの品質向上効果について、今後も定量的な評価を進めるとともに、より効果的な技術開発に取り組むことも必要である。



## 13. 水温上昇等に対応したノリ養殖技術の開発

### 13.1 ノリ高水温耐性品種の開発

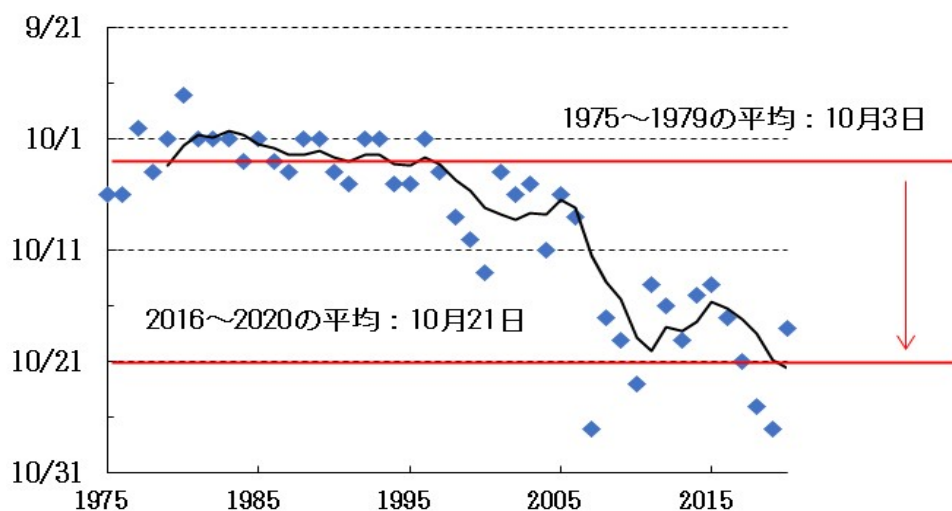
水産庁では、ノリ養殖の主要な生産県である福岡県、熊本県とともに、環境変化に対応したノリ養殖技術開発に取り組んだ。このうち福岡県、熊本県ではそれぞれ高水温環境でも生育可能なノリの品種作出に取り組んできた。

#### 13.1.1 有明海のノリ養殖と採苗にかかる水温環境の変化

ノリ養殖は、日本の海面養殖業において生産量でおよそ 27%、生産額でおよそ 20%を占めているが、そのうち、有明海沿岸 4 県(福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県)で国内生産量のおよそ 60%を占めている。

養殖に用いられるノリは、冷水性のスサビノリから繰り返し選抜されたナラワスサビノリという栽培品種でほぼ占められているが、もともと高水温に弱く、ノリ芽は 23℃より高い水温に長期間さらされると傷害やくびれが多数生じるなどの異形化により生育不良となる<sup>1)</sup>。

有明海においては、第 2 章表 2.4.2-1 で示したように、水温は 12 地点のうち、3 地点(A4 海域)で有意な上昇傾向がみられている。特に 1990(平成 2)年代後半以降はノリの採苗期に相当する秋の水温降下が遅れている。このため、採苗時の高水温によるノリ芽の不調で生産に影響が及ぶ事例も生じている<sup>2)</sup>ことから、有明各県では 2000(平成 8)年代以降、採苗日を 1 潮汐遅らせ、海域の環境がノリ養殖に適した状態になるのを待って漁期を開始するようになった(図 13.1-1)。



データ:内藤 剛, 藤井直幹(2020):有明海漁場に適合した高水温耐性品種の開発と養殖適性の評価. 平成 31 年度養殖業成長産業化技術開発事業(6)環境変化に適応したノリ養殖技術の開発報告書, 15-19.

図 13.1-1 福岡県有明海におけるノリ養殖採苗日の推移

出典:環境省(2021)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第 7 回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

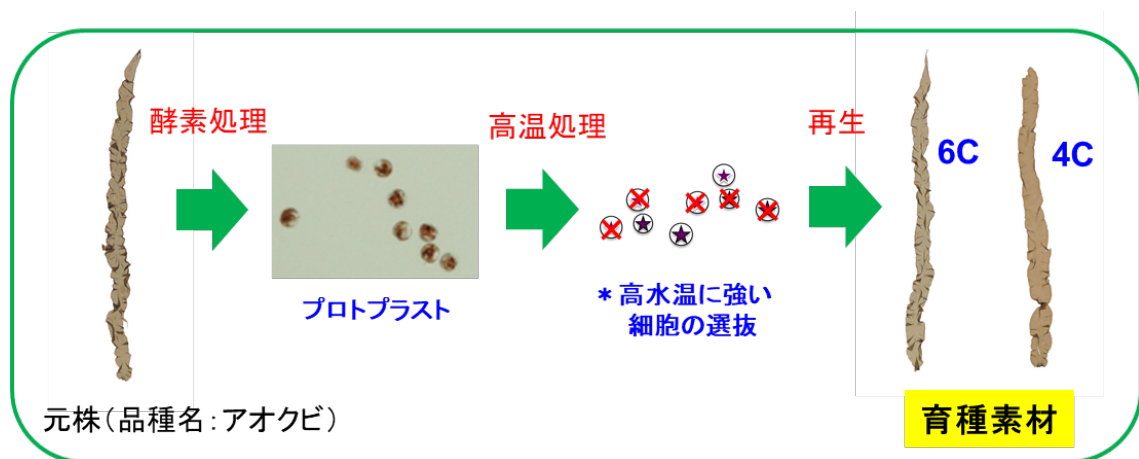
採苗日を遅らせる取組は、これまでのところ生産量を安定化させる効果を生んでいる。しかし、

今後気候変動による水温上昇の影響がより顕著になることが予測され、採苗・育苗期の高水温により生産が不安定になるリスクは高まっている。また、代表濃度経路シナリオ(RCP シナリオ)に基づいたモデル予測では、採苗日は21世紀末には11月(RCP2.6)、12月(RCP8.5)にずれ込んで漁期が短くなり、有明海におけるノリ生産量は減少すると予測されている(国立環境研究所 <https://adaptation-platform.nies.go.jp/conso/report/6-1.html>)。

### 13.1.2 温暖化に適応したノリ品種作出の取組

このような背景から、水産庁は環境変化に対応した養殖技術開発の一環として、高水温環境でも生育可能なノリの品種作出に取り組んでおり、このうち福岡県、熊本県では既往のプロジェクト研究で開発された共通の「ノリ育種素材」を使用して、それぞれ新たな高水温耐性品種の開発を行っている。

使用した育種素材 6C 株、4C 株は、秋季の育苗期を想定して「水温 24℃で 2 週間以上生育可能」であることを目標として開発されたものである。もともと高水温に強いとされる品種アオクビを元株として、酵素処理によりプロトプラスト化した葉状体の細胞に高水温負荷(26~30℃)をかけ、ここから選抜した細胞を葉状体まで再生させる工程を繰り返して作出された(図 13.1-2)。これらの育種素材を、漁期開始期の高水温環境を模した条件(24℃で 2 週間培養した後、適温の 18℃で 1 週間培養)で培養した結果、高温障害の形態的指標となる藻体のくびれの数が元品種のアオクビ葉状体より明らかに少ない等、室内実験の環境ではすでにその高温耐性に係る特性は実証されていた。



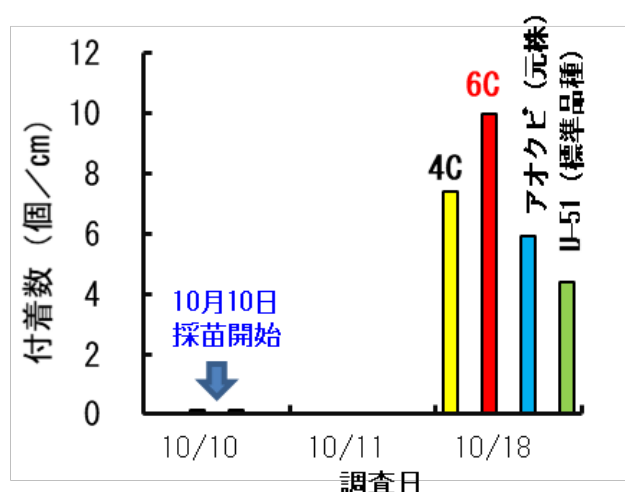
参考文献:藤吉栄次, 玉城泉也, 中川雅弘, 丹羽健太郎, 安池元重(2019)「派生株の高水温耐性調査および育成株の成分調査. 平成30年度環境変化に適応したノリ養殖技術の開発委託事業報告書」(pp. 33-37.)より簡易概念図として作成した。

図 13.1-2 ノリ高水温耐性育種素材を作出したプロトプラスト※選抜法

※細胞壁を酵素処理により取り除いて単細胞化されたもの

出典:環境省(2021)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第7回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

現在、福岡県や熊本県をはじめとする県では、このノリ育種素材の高水温耐性を野外での養殖試験等で実証すること、また育種素材からさらに選抜を行って、高水温耐性とともそれぞれ地域の環境や産業ニーズに適合した特性を併せ持つ品種を作出することを目標に研究開発が行われている。福岡県では、10月初旬の高水温(25℃)環境下で、育種素材、アオクビ及びノリの品種登録における特性評価の対照品種U51の採苗試験を実施した。採苗を開始してから8日後のノリ網へのノリ芽の付着数は育種素材、特に6C株で、アオクビ、U51と比較して良好であった(図13.1-3)。



注) 野外採苗したときの育種素材(6C,4C)、アオクビ(育種素材の元品種)、U51(標準品種)

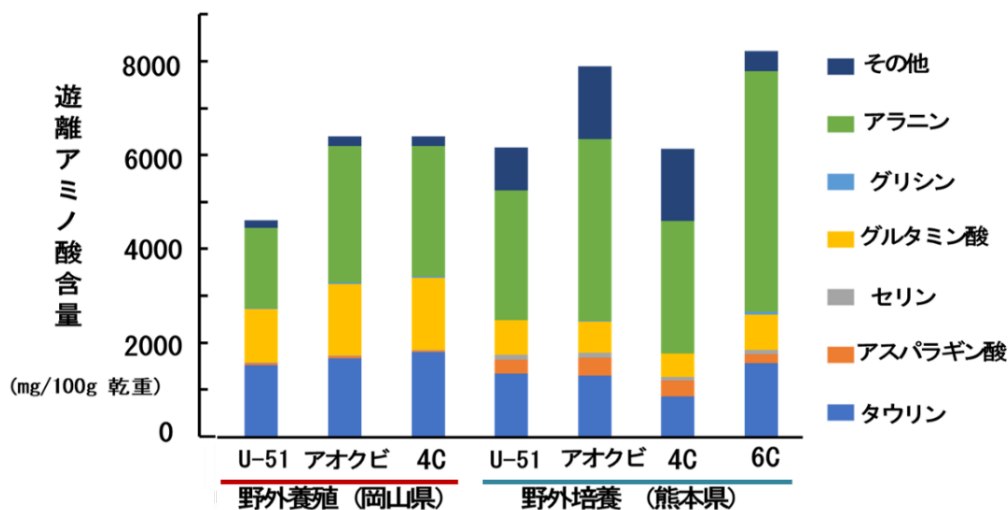
参考文献: 藤吉栄次, 玉城泉也, 中川雅弘(2020): 派生株の高水温耐性調査および育成株の成分調査. 平成31年度養殖業成長産業化技術開発事業(6)環境変化に適応したノリ養殖技術の開発報告書, pp. 33-39.

図13.1-3 有明海で10月初旬の高水温下(25℃付近)でノリ芽の付着数。

出典: 環境省(2021)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第7回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

また、得られたノリ芽を高水温下で育成(24℃で2週間培養した後、18℃で1週間培養)したところ、生長は6C株が最も優れていた。これらの結果より、育種素材は漁期開始期の漁場の高水温環境に適応した特性を有することが実証され<sup>5)</sup>、現在、さらに選抜した株の形態や重量等、収穫量に係る特性の評価が行われている。また、熊本県や岡山県で試験養殖した葉状体について、呈味に係るアラニンやグルタミン酸等の遊離アミノ酸含量を測定したところ、育種素材では既往の品種と同等もしくはそれ以上の濃度が検出され、味の面でも遜色がないことも明らかとなった<sup>5)</sup>(図13.1-4)。

水温環境の変化のみならず、栄養塩濃度の減少による色落ちやアカグサレ病等の病害蔓延等、ノリ養殖において対応すべき課題は多い。わが国有数の養殖業を維持するために、継続的な研究開発は今後も欠かせない。



注) 野外採苗したときの育種素材(6C,4C)、アオクビ(育種素材の元品種)、U51(標準品種)

参考文献: 藤吉栄次, 玉城泉也, 中川雅弘(2020): 派生株の高水温耐性調査および育成株の成分調査. 平成 31 年度養殖業成長産業化技術開発事業(6)環境変化に適応したノリ養殖技術の開発報告書, pp. 33-39.

図 13.1-4 各ノリの遊離アミノ酸含量

出典: 環境省(2021)「有明海・八代海等総合調査評価委員会 第7回水産資源再生方策検討作業小委員会資料」

#### 参考文献

- 1) 三根崇幸, 横尾一成, 川村嘉応(2013): 高水温がノリ幼芽の生育に及ぼす影響. 佐賀有明海水産振興センター研究報告. 26, pp. 83-88.
- 2) 横尾一成, 川村嘉応(2014): 採苗開始時の環境がノリ養殖の生産性に及ぼす影響. 佐賀有明海水産振興センター研究報告. 27, pp. 61-69.